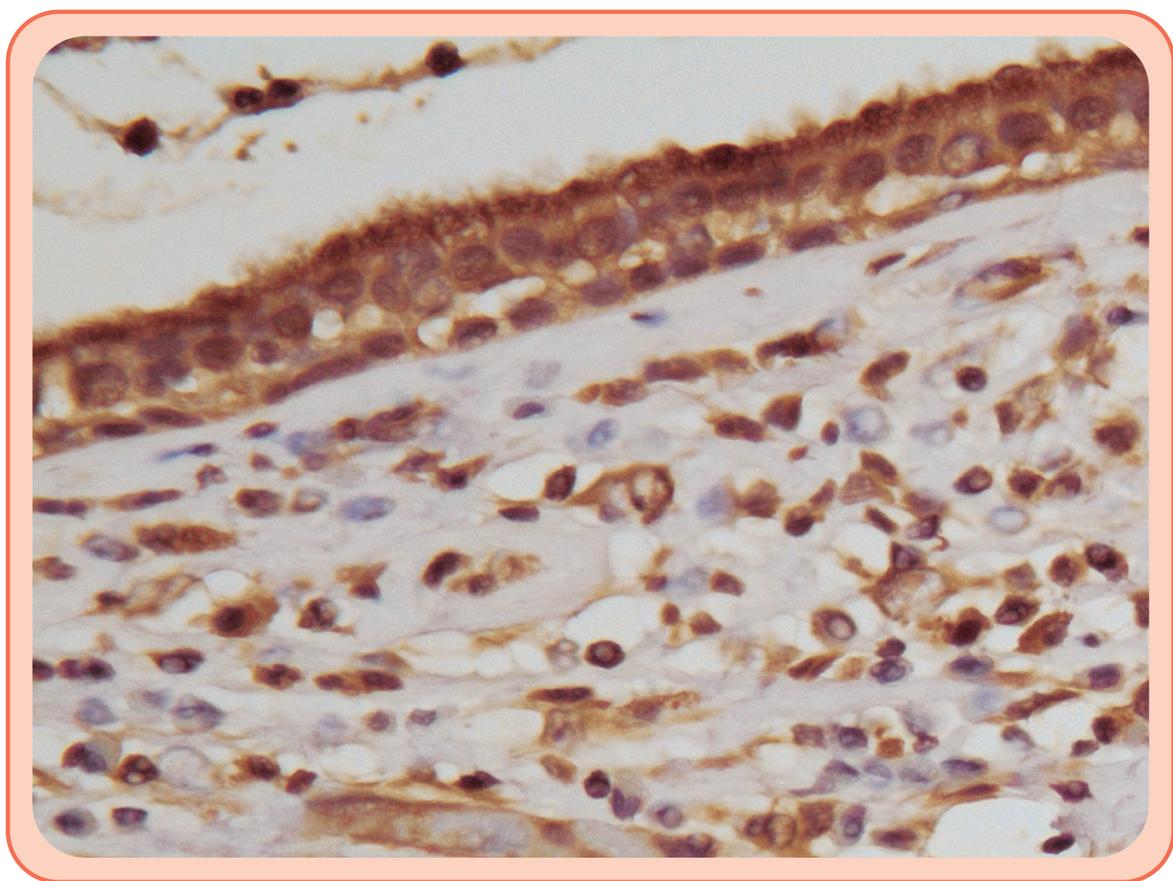


第 26 号

さくらしま

2012



鹿児島大学大学院
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室

同門会誌

〔表紙写真の説明〕

好酸球性副鼻腔炎の鼻茸を vascular endothelial growth factor receptor (VEGFR) 1で染色した。鼻茸上皮および鼻茸に浸潤した炎症細胞に強い発現を認めた。

目

次

巻頭言	1
会長の挨拶	2
二人の恩人を偲んで 大山勝名誉教授	4
I. 同門会通信	7
II. 同門会員業績・学会発表	11
III. 教室来訪者	13
IV. 教室行事	
1. 共催の講演会	14
2. 第14回さくらじまフォーラム	17
3. 第11回「鼻の日」市民講座	18
4. 第5回耳の日ならびにアレルギー週間公開講座	19
V. 同門会報告	21
VI. 地域医療報告	
1. 学校保健（統計報告）	23
VII. 特殊外来通信	
1. 難聴・耳鳴・めまい外来	26
VIII. 手術実績	27
IX. 病理集計	28
X. 各省庁諸研究	29
XI. 業 績	
1. 原 著	30
2. 総 説	32
3. 座談会	33
4. 国内学会発表	33
5. 国際学会発表	41
XII. 医局通信	
1. 新入局員紹介 井内寛之	43
2. 医局人事	43
3. 学会報告	
①第23回日本喉頭科学会・学術講演会	44
②第23回日本アレルギー学会春季臨床大会	44

③第112回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会	45
④第6回日本小児耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会	45
⑤第35回日本頭頸部癌学会総会	46
⑥第73回耳鼻咽喉科臨床学会・学術講演会	46
⑦第26回九州連合地方部会学術講演会	47
⑧第18回マクロライド新作用研究会	48
⑨第41回日本耳鼻咽喉科感染症研究会・第35回日本医用エアロゾル研究会	48
⑩第24回日本口腔・咽頭科学会総会・学術講演会	49
⑪第5回九州頭頸部癌フォーラム	50
⑫第63回日本気管食道科学会総会・学術講演会	50
⑬第21回日本耳科学会総会・学術講演会	50
⑭第50回日本鼻科学会総会・学術講演会	51
⑮第22回日本頭頸部外科学会総会	52
⑯第30回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会	52
⑰第24回日本喉頭科学会・学術講演会	54
⑱第24回気道病態研究会	54
4. 国際学会発表	
①10 th International SYMPOSIUM Recent Advances in Otitis Media	55
② XIV IRS 14th International Rhinologic Society XXX ISIAN 30 th International Symposium on Infection and Allergy of the Nose	56
③11 th Japan-Taiwan Conference on Otolaryngology-Head and Neck Surgery	57
5. 関連病院便り	
①鹿児島医療センター	58
②鹿児島市立病院	60
③藤元早鈴病院	60
④鹿児島生協病院	61
⑤天辰病院	63
XIII. 関連病院と診療日案内	64
XIV. 海外同門会名簿	67
XV. 自治医科大研修生	71
同門会会則	73
編集後記	75

巻 頭 言

黒 野 祐 一

昨年3月11日に発生した東日本大震災からすでに1年あまりが過ぎましたが、未だに不自由な生活を強いられている多くの人々がいることに心が痛みます。そして、原発事故への対応から鹿児島県の川内市を含む全国の原発原子炉が停止し、この夏の大規模な節電の必要性が報じられています。また、先日は桜島の爆発が相次ぎその数週間前にはつくば市で大竜巻が発生するなど、立て続きに起きる自然災害に脅威を感じます。

したがって、今こそ我々はこのように事態にどのように対応すべきかを冷静に考えねばなりません。医療現場においても同様で、不測の事態に直面したときにどう対処するか、あるいはそれを予測しこれを回避するためには何をなすべきかを、確固たる根拠を持って論理的に思考することが重要です。しかし、最高水準の教育を受けた医師が皆このような論理的な考え方を身につけているかと言えば、甚だ疑問に思われます。

それは、昨今の学生の臨床実習を見ていると気づきます。たとえば、咽頭痛を主訴とする患者さんの問診を指示すると、多くの学生は扁桃炎や咽頭癌などの咽頭痛を伴う疾患を列挙し、それぞれの症候の有無により消去法で診断しようとしています。発熱を伴うのか、嚥下や構音障害はないかなど、咽頭痛を起点とした論理的な展開ではなく、単に記憶に頼る想起的な考え方で対応することに慣らされているようです。医師国家試験問題がそのような形式になっていることが大きな要因でしょうが、それ以前の高校や大学の入学試験もほとんどが想起問題で、受験勉強で優秀な成績を修めた医学部の学生がそのような思考をするのは仕方ないことかもしれません。しかし、彼らも幼いころは、宇宙や生命の神秘に心をときめかせた科学少年や少女であったはずで、その謎に迫るための論理的な考え方に憧れていたはずで、教育で何とかならないか、なんとかしなければというのが、今の私の願いであり課題でもあります。ここで弊害となっているのが情報化社会の発達で、医療においても新しい情報に追従することが精一杯で、これを整理し論理的に思考する暇などありません。しかし、不測の事態には、経験に基づくマニュアルのみでは対応できません。そして、この論理的思考は教えられるものではなく、自ら学び取る姿勢がなければいつまで得ることはできません。

論文を書くことが最も簡単で効果的な方法であるというのが私の持論ですが、若い世代にはなかなか伝わりません。そう思いあぐねているところで見つけたのが、昨年亡くなったステイブ・ジョブズ氏の言葉「Keep it simple. Simple can be harder than complex.」です。IT革命の覇者である氏のこの短いメッセージこそ、私の意図するところであり、現在社会への警鐘のようにも思われます。

新春雑感

山 本 誠

今年ほど新年を待ち焦がれた事はありません。同じ1日の繰返しなのに1年1年と区切る事により、我々は気持を新たに希望と期待を持てるのだなと実感した時でした。昨年は東関東大震災や大津波さらには福島第1原発のメルトダウンと空前絶後の大災難や中東の春やユーロ危機と国内外に多事多難の年で未だに火種はくすぶっています。同門会においては、春の叙勲で大山先生が受賞されたのは大変喜ばしく、祝賀会には多くの方々の御出席をいただいて盛会に終わられた事に心から御礼申し上げます。一方鹿児島県の耳鼻咽喉科医療や耳鼻咽喉科医の育成に多大の貢献をいただいた勝田先生を失った事は同門会ばかりか私個人にとっても残念でなりません。私が耳鼻咽喉科医になるきっかけを作ってくださり、厳しい御指導の元にもかかわらず開業もできました。ゴルフでは「人に迷惑をかけるな。打ったら2・3本クラブを持って走れ」と教えられましたので、今でも早打ちで、打ち終わると数本のクラブを抱えて小走りです。後ろから「走らんか」と勝田先生の声が聞えてきそうです。先生はお酒も大好きでした。60才以後は弱くなりましたが、それでも焼酎を薄く薄くして目を細目ながらおいしそうに飲んでおられる姿が目につきます。同門会も年々顔触れが変わります。わかには会の平均年齢も50才を超えてきており、高齢医同門会になりつつあります。そうならないよう新しい耳鼻科医を殖やす必要がありますが、愚息も耳鼻科に入れられないのが現状です。何かいい知恵はないでしょうか。黒野先生が提案されている奨学金制度も検討すべき時と思われま

す。

「知ってるはずの人の名が出てこない」「夜中に突然足がつる」「同窓会では病気の自慢をする」「アイドルの顔はどれも見分けがつかない」「曲のタイトルか歌手の名前かもわからない」「書類は拡大コピーをお願いします」「ウコン、青汁、黒酢、プリンとあれこれ愛用している」「最近の歌は何度聞いても覚えられない」「会話はいつも代名詞ばかり そこん あいを なんしてみれ」「酔っぱらった後の記憶は部分喪失」以上は高校の後輩が歌っている歌詞の一部で「自分達にぴったりだ」と同級生にCDをもらいました。これを実感させられる事が起きました。生まれて初めてインフルエンザに罹患したのです。朝から寒気がしていたのですが、暖房を強くしても治まらずに手指や体中の筋肉が点状に痛くて普通の風邪ではないのではと思いながら診療を終えました。夕食後も熱っぽいので検温すると38.8℃あり、まさか自分がインフルエンザにと思いながら検査するとA型でした。休診せざるを得ない状況になりましたが、幸いにもA先生の応援がもらえて休診する事なく乗り越えられました。A先生には本当に感謝しております。今

まで体だけは自信を持っていましたが年を自覚させられました。この体験で2つの事を学びました。1つは無理をしてはいけないし、自分を過信しない。2つ目は急病の時の対応策を作っておくべきであるという事です。これは個人としてだけでなく同門会や地方部会、医会の中で検討する必要があります。私の場合はA先生の情報を持っていたので急場を凌げました。同門会や月1回開催される学術集会後の情報交換会を通して、様々な情報の交換や親睦を深める事が大切です。来年は1月24日、25日に日本頭頸部外科学会が鹿児島で黒野教授の元に開催されますので、同門会の先生方の御協力をお願い申し上げます。

二人の恩人を偲んで

大 山 勝 (鹿児島大学名誉教授)

今年の2月同じ日に、個人的にも仕事の面でも特別にお世話になった2人の大先生が相次いで亡くなられた。一人は、新潟大名誉教授のF先生であり、超微機能形態学（解剖学）特に走査電顕（SEM）の大家であった。先生は、自らの母校東大の解剖学教授に決まったにも拘わらず、それを断り、新潟大に残ったという高名、伝説の主人公である。そのこともあって、学内外の多くの研究者から敬愛、慕われていた。昭和40年後期は、先生方が開発された切断SEMで胞体内超微構造の立体的研究が始動した頃だった。昭和48年の後期、小生は大腸疾患を患い三重大学病院に入院中であつたが、厚顔しくも電話で“新潟でのSEM研究の見学と試料作製法の実際などを見学したい”旨、直接先生に訴えた。内緒で入院中の病院を抜け出し、単身で新潟に向かい、解剖学教室の門を叩いたのが、先生との出会いである。未だ下痢状態が続いていたが、到着の夜は、先生が常連の居酒屋に案内して貰った。新潟の美酒で消化管粘膜の洗浄とアルコール固定すれば病気は良くなるよと冗談を放ちながら越後酒に浸った。無茶なことだと思ひながら先生の笑みとユーモアに誘われながら杯を酌み交して了った。しかし、不思議なことに、翌日から心配された下痢傾向は収まり、胃腸の調子は完治とはいえないが信じられないほど快調になった。持参した鼻副鼻腔炎病的粘膜の資料も予定通りに切断SEM観察と写真撮影が出来た。帰路の列車は、疲れも覚えず往路より著しく短く感じた。仕事が旨く成就した時は、心身共に快調になるものだ。自分自身驚いている。その後の入院期間は予定より著しく短縮されて、翌週末には退院し、わが家での2週間の療養をとることとなった。その後、職場復帰し、例の如く教育、研究、臨床に従事した。昭和52年、幸運にも鹿児島大学の教授に決まり、11月には郷里に錦を飾ることもできた。翌年から再び新潟大と鹿児島大とのSEM協同研究が本格的に始まった。

鹿大の教室員1～2名が資料を持参し、3～4日間現地滞在してSEM研究が行われた。研究助手のA先生の筆舌に尽くしがたい指導のお陰で、仕事は、常に順調に捗り、予期以上の進展がみられた。また、解剖学教室は、常に家族的な雰囲気に入れられ、昼食には当番で美味しい味噌汁が作られ振舞われたり、北国の漬物が出された。家族的な雰囲気で昼食、歓談の時間は楽しいものだった。また、時間のある時は、大学に隣接する寿司屋を訪ねて、新しいネタと新潟米に舌鼓を打った。

このようにして、ヒトの上気道の粘膜病態、各種生物の嗅粘膜の比較SEM研究、最終的には世界で初めてのSEM映画記録など新研究と夢は大きく開いた。なかでも、人間の嗅上皮細胞のSEM像は、世界的にみて稀有であり、各国の研究者から文献請求が

あった。中でもイタリアの有名な解剖学書の一頁を飾らせて貰ったことは特筆すべきであろう。これらの研究と併行して電顕グループ教室員の精力的な努力によって、鳥取大解剖学教室のT教授の下で胞体内構造の反射電子像の記録、これと通常のSEM像とを用いて、カラー立体SEM像の撮影に成功した。これら研究上の必要性から教室には一時的に走査電顕3台、透過型電顕1台を保有することになり、SEM研究の臨床分野でのメッカの一つに数えられるようになった。

これらの研究成果の多くは、第85回日耳鼻総会（1984年、ホテルニューオータニ東京）の宿題報告で発表され聴衆の絶賛を浴びた。後日、北欧を中心とする高名な鼻科学研究者（ドレットナー教授、トールマルム教授、トス教授他）達から奨讃と敬意の手紙や声を頂いて感動、感激、感謝した。新潟のF名誉教授と共に鳥取のT名誉教授のお陰と心から感謝している。

しかし、F先生は、先日、黄泉の国に旅立たれて了った。今となつては、先生の笑顔も情熱ある口調のユーモアも聞いたりお目にかかれなくなった。残念でならない。心からお悔やみ申し上げる。

2人目の先生は、関西医大名誉教授のK先生である。先生は、常に笑顔で冗談の絶えない人だった。しかし、研究の話になると眼の色が変わり、口角泡を飛ばし手ぶり身ぶりで自論を通す情熱的な論客だった。不正と曲がった道理を許せない考えの持ち主でもあった。先生が、偶然、新潟大のF名誉教授と同じ日に亡くなられた。お二人の敬愛する大先生が相次いで同じ日に天国に旅立たれ、驚きと悲しみで一杯だった。心からご冥福をお祈りすると共に哀悼の意を捧げたい。

さて、K先生との出会いは、当時大阪医大の教授をされていた鹿児島生まれのT先生と恩師、当時三重大教授のM先生のお力添えによるものであるが、鹿児島大教授選考の前頃からであった。この御3人の先生方は、アルコールが好きで強いことでも有名だった。アルコールに弱い小生にとっては、先生方との宴席は楽しかった一方でお付き合いが大変なこともあった。小生が鹿児島大教授になってからは、ゴルフの親睦団体“大山^{だいせん}かい”（鳥取の大山山麓のゴルフ場でスタートしたための名称）に入れていただき、大変お世話になった。現在は体調をくずして欠席し、メンバーの皆様にご心配とご迷惑をかけていることを寛容下さい。

大山会への参加で、多くの他大学教授の先生方と親交を深めお付き合いの範囲が大きく拡がり感謝している。小生自身、ゴルフの腕は一向に上がらなかったが、人付き合いと親睦の実を上げるコツは大いに上がることになった。一方、国内、国際両研究集会の分野でも先生の友好と先進向上の精神で、会を結成されて来た。頭頸部自律神経研究会はその一つであり、アジア諸国の有名大学との集会“中韓台5大学耳鼻咽喉科合同集会もそうである。延世大学（韓国）、台湾大（台湾）、鹿児島大、関西大、大分医大

が、交代で持廻り当番で行い、若い研究者の登場の場を提供しながら人的、学問的交流をはかるのに大いに貢献した。発表の席でも懇親会の席でもK先生固有の笑顔とジョークは会をなごますのに役立つと共に若い人達の緊張をとるのに貢献した。さて、人間の原始的動機には、次の二つがある。1. 親和動機 affiliate motivation といって、他人と楽しく喋りながら最後は仲良く目的を達成しようという動機 2. 達成動機 achievement motivation といって、予め独自の目標を定めて、それに向かって着々と目的を達成しようという動機である。K先生のゴルフ上達のやり方は、まさに親和動機そのものであり、参加する人々が不思議とやる気を起こすようになっていた。小生は途中で参加を止めて了ったので、これにあやかることはできなかった。今や先生と共に切磋琢磨、物事を成就する機会は無くなった。残念至極でならない。一方、新潟のF先生の仕事への情熱は、達成動機そのものであり、人々の尊敬を集める原因となっている。そして、F先生もK先生も常に笑顔で相手の共感と喜びをもたらすという点では共通したものをお持ちであった。我々にとって貴重な人生訓、道標となっている。心から感謝している。

追伸：昨年9月の小生の叙勲、瑞宝中綬章授賞記念祝賀会では、同門の先生方には大変お世話になり、心から感謝いたしています。また、教室員ならびに関係者のご苦勞に対しても心から御礼申し上げます。

心に残る患者さん

坂本耳鼻咽喉科 坂本邦彦

平成19年、5月の連休を利用して2泊3日で奄美大島へ旅行した時のことです。山口県内の耳鼻咽喉科の友人・知人8名でのグループ旅行であり、少人数ながらガイド付の観光バスを仕立てて島内各地を回っていました。その最終日、ガイドさんから「本日は研修生が参加しますので、よろしくお願ひします。」と紹介がありました。その若い研修生にたまたま出身地を尋ねたところ、最も記憶に残っている患者さん（Fさん）の集落と同じだったのです。そこで、「永久気管口があり、声が出なくて少し脚に麻痺がある、歳は70前くらいのFさんという人を知りませんか？」と聞いてみました。すると「多分よく海岸を散歩しているあの方だと思います。」と返答があったので、その場で名刺にメッセージを書いてFさんらしい人に届けてもらうよう依頼しました。

Fさん（当時54歳）は、私が福島泰裕先生と一緒に県立大島病院へ赴任した平成3年に受診されました。前壁型の下咽頭癌と判明しましたが、右頸部の転移巣が総頸動脈を巻き込んでおり、すでにかかなりの狭窄が認められました。そこで、病院長の小代正隆先生（血管外科）にお願いして総頸動脈の移植を行っていただくことになりました。喉頭全摘と頸部郭清は福島先生と二人で行いました。その後退職する平成8年まで経過観察を続けました。福島泰裕先生、大野文夫先生、牛飼雅人先生、伊東一則先生はFさんのことを記憶していらっしゃると思います。その後山口に帰ってからはFさんのことを思い出しながらも、連絡先を把握していなかったので私にとっては消息不明だったのです。

奄美旅行から帰って4日後、電話がありました。「先生、親父は元気です。その後再発もありません。メッセージをいただき、ありがとうございました。」神戸在住のFさんの息子さん（長男）からでした。「手術から15年。よくぞ生きていて下さった。」と、感無量でした。奄美旅行での偶然によって、再びFさんと繋がったのです。その後は一年に2回程度連絡を取り合うようになりました。一昨年には奄美の水害で被災されたので、お見舞いをお送りしました。すると翌年（平成23年）3月に、今度は佐賀在住のFさんの息子さん（次男）が、わざわざお礼を言うために私の診療所に立ち寄って下さいました。そしてその半年後、佐賀の息子さんから電話で、「父の胆嚢に進行癌が見つかって、年末まで持たないかもしれない。」との連絡がありました。その連絡を受けた時、「F

さんがご存命のうちに一度面会して直接感謝の意を伝えなければならない。」と強く思いました。当時、総頸動脈の移植をして頸部郭清を行うことは一般的ではなく、勝算は十分にあると思っただけでも、賭けに近いところもありました。Fさんやご家族の皆さんと十分に話し合いました。その結果、ご本人や家族の皆さんが勇気ある決断をされたのです。命を賭けて我々とともに頑張った結果を残して下さったFさんの存在を、心からありがたいと思いました。このような患者さんがおられるからこそ、我々は前を向いて頑張ることができると思うのです。

昨年11月20日（日）、日帰りで奄美に行きました。Fさんの奥さんや親戚の皆さんが病院の玄関に出迎えて下さいました。そして入院中のFさんに面会し、感謝の意をお伝えしました。平成8年以来の再会を、涙を流して喜んで下さったのには感激しました。

そして今年、元旦のその日にFさんが静かに旅立って行かれたことを、息子さんからの電話で知りました。初診から20年。私に大きな大きな力を与えて下さった患者さんでした。

（平成24年2月11日 記）

～ 延 岡 追 想 ～

下 麥 哲 也

5年ぶりの寄稿となります。平成20年に鹿児島を離れた後は、宮崎県延岡市にある平田病院（現：平田東九州病院）で勤務（武者修行？）していました。長い間ご無沙汰していたことを、深くお詫び申し上げます。今回は、私が過ごした延岡を振り返り、筆をとりました。駄文ではございますが、しばしの間お付き合いください。

延岡市は、宮崎県の北限に位置し、人口約10万人。天孫降臨の地、高千穂を源とする数々の清流に恵まれた水の都として、古くから栄えていたといわれます。現代に至り、日本を代表する化学企業「旭化成」の誘致に成功したことから、最盛期には宮崎市をも凌ぐ税収を記録したこともあったそうです。その旭化成は、宗兄弟をはじめとする、数々のアスリート達を輩出し、彼らが活躍した「延岡西日本マラソン」は、今日でも延岡において「弘法大師祭」と並ぶ、町を挙げての一大行事となっています。一方で、私が赴任した「平田病院」は当初、延岡市でも南端の港町、土々呂町にあったため、旭化成や大きな川といった「延岡らしさ」とはかけ離れた、のどかな地方病院でした。そんな平田病院を私が選んだのは、土々呂の地を訪れて、郷愁と人情、自然あふれる環境に惹かれたことと、当時から耳鼻咽喉科医として開業する思いはあったものの、まだ独り立ちする自信は持ち合わせていなかったからです。

こうして私の延岡暮らしは始まりました。私の生まれは鹿児島ですが、琉球大学在学中に沖縄暮らしを6年経験したこともあり、地続きの延岡は沖縄以上に鹿児島に近いであろうと考えていましたが、現実はその甘くはありませんでした。文化、言語の違いは想像以上で、さびしく静まり返った外来を見るたびに、外は晴天の土々呂というのに、気持ちは高千穂の深雪を感じさせる日々が続きました。そんな時に私を救ってくれたのは、理学療法士をはじめとする、多くのコメディカル職員でした。若さと情熱に満ち溢れた、彼らと切磋琢磨するうちに、あっというまに1年が経ち、平田病院はより延岡市中心に近い伊形町へ移転し、名称も「平田東九州病院」と変わりました。新病院に移転するころには、じょじょに患者も増え、延岡の人々とのコミュニケーションにも自信がついてきたのですが、ここで大きな試練が私を待っていました。赴任当初から共に働いてきた医師が相次いで退職したため、残った医師とともに「回復期リハビリテーション病棟」および「緩和ケア病棟」の診療を依頼されたのです。私も耳鼻咽喉科医ですが、残った医師も放射線科医、麻酔科医と苦戦していました。負けず嫌いな性格も手伝って、こうなれば一蓮托生と、またもやコメディカル職員の助けを借りながら、耳鼻咽喉科と二足（三足以上？）の草鞋を履く生活が始まりました。紆余曲折あったものの、回復期

リハビリは、整形外科医が就職してくれたおかげで、彼に担当を譲りましたが、緩和ケアは適正があったのか、そのまま診療部長に任命されました。

その後、平田東九州病院は、緩和ケア部門も含めた病院機能評価に合格し、このまま延岡でもやっていけそうだなと、思い始めた矢先、実家で両親が相次いで病に倒れたという報せが届きました。頻繁に帰郷するようになると、改めて鹿児島と延岡の距離感を実感し、患者のお看取りの時にしばしば両親の最期を考えるようになりました。このことが転機となり私の両親の住む、いちき串木野市湊町で開業することを決意しました。

今後は、延岡で頂いた数々の貴重な経験を、日々の診療に生かしてゆくよう、精進して参る所存です。ご迷惑をおかけすることもあるかもしれませんが、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

坂本耳鼻咽喉科 坂本邦彦

発表

周南感染症講演会 平成23年9月3日 (周南市)

「耳鼻咽喉科領域におけるハンセン病の局所所見」

坂本邦彦

特別講演に黒野教授をお迎えしての講演会で、前座を務めさせていただきました。座長は元大分医科大学耳鼻咽喉科助教授の前田昇一先生、企画は元同大学耳鼻咽喉科講師の梅原豊治先生でした。全員黒野教授に深いご縁があり、たいへん居心地の良い講演会となりました。二次会が大いに盛り上がったのはいうまでもありません。

第44回周南耳鼻科医会 平成23年10月29日 (周南市)

「徳山医師会病院における嚥下障害の取り組み」

坂本邦彦

国内では珍しい完全オープンシステムの徳山医師会病院(390床)で、3年前に組織された嚥下障害対策チームの取り組みを紹介しました。外科、呼吸器内科、リハビリ担当医などの常勤医4名と耳鼻科咽喉科医の私、歯科医1名、担当ST、担当看護師、栄養管理士など嚥下に関わる全領域のスタッフが参集するチームです。スクリーニング、VE、VFを行った後に通常の嚥下のリハビリを実施していますが、他に川崎医科大学に依頼したボツリヌス毒素の輪状咽頭筋への局所注入療法の効果や、干渉低周波刺激(電氣的刺激法)を使用した嚥下障害のリハビリ(臨床研究中)の成績を含めて紹介しました。徳山医師会病院のリハビリテーションセンターでは現在PT29名、OT15名、ST7名の合計51名が働いており、日曜・休日もフル稼働しています。さらに平成24年1月に当病院では初めての輪状咽頭筋切断術も実施し、有効な結果を得ました。嚥下障害の診断、検査、そして理学療法から外科的治療まですべてをカバーする体制が整いつつあります。とくに電氣的刺激法は、国の内外を問わず様々な方法が試みられていますが、これを確立できれば耳鼻咽喉科診療所でも嚥下障害のリハビリを容易に行えるようになる期待されます。この夢を持って取り組みを続けてゆく所存です。

著書・論文

K.Sakamoto (分担執筆)

Otorhinolaryngological Findings of Leprosy.

Leprosy-Science working towards dignity. Tokai University Press (Kanagawa), pp.209-215, 2011

平成21年6月にご指名をいただき、分担執筆することになりました。かつて3年間在籍した星塚敬愛園で撮影した数多くの局所画像から41枚を抽出し、アトラス風にまとめました。本書は東南アジア、インド、アフリカ、南米など、未だハンセン病が終焉していない国々の医療者や研究者、医療系の学生を対象にした英文教科書です。海外の研究者によるハンセン病の歴史と疫学の記述、各国やWHOが取ってきたこれまでの対策、基礎の研究者による格段に進歩した研究成果の記述、確立された治療法など、読み応えのある内容がぎっしり詰まっています。ハンセン病は2009年と2010年には国内の日本人の新患者数が0人となり、2010年末の新患を除く菌陽性者数もわずかに5名となりました。東南アジアや南米からの外国人の新患が年に2～4名ありますが、国内では確実に終息に向かっている状況です。

せんだい耳鼻咽喉科 内 菌 明 裕

発表

著書・論文

内菌明裕

小脳橋角部腫瘍術後に発症した対側顔面痛に桂枝加朮附湯と呉茱萸湯が有効であった症例 痛みと漢方 21. 65-67, 2011

第19回日本東洋医学会九州支部鹿児島県部会学術講演会 平成23年2月11日 (鹿児島)

「耳管開放症に対する補中益気湯の効果」

内菌明裕

第24回日本疼痛漢方研究会学術集会 平成23年7月2日 (東京)

「所見のない耳痛に対する漢方薬の効果」

内菌明裕

第41回日本耳鼻咽喉科感染症研究会 平成23年9月2日～3日 (東京)

「高感度肺炎球菌抗原検出キットおよびインフルエンザ菌抗原検出キットの使用成績」

内菌明裕, 山中 昇

Ⅲ. 教室来訪者

教室来訪者（平成23年4月～平成24年3月）

- | | | |
|----|-------------------|--------|
| 7月 | 九州大学大学院医学部耳鼻咽喉科教授 | 小宗 静 男 |
| 7月 | 島根大学医学部耳鼻咽喉科教授 | 川内 秀 之 |
| 7月 | 熊本大学大学院医学部耳鼻咽喉科教授 | 湯本 英 二 |

1. 共催の講演会

1. 第76回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会 平成23年4月14日
 特別講演1：「思春期ウイルス感染と頭頸部がん」
 金沢大学大学院医学系研究科 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 教授 吉崎 智一 先生
 特別講演2：「スギ花粉症の病態と治療戦略 -薬物療法から免疫療法まで-」
 島根大学医学部 耳鼻咽喉科 教授 川内 秀之 先生

2. 第17回南九州上気道感染症臨床懇話会 平成23年5月26日
 特別講演：「上気道感染症はなぜ難治化したか？ -したたかな細菌とその対策-」
 和歌山県立医科大学 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 講師 保富 宗城 先生
 一般演題：「扁桃周囲膿瘍患者における口蓋扁桃組織および膿汁への薬剤移行性の検討」
 大堀 純一郎 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）
 「小児難治性中耳炎に対するオゼックス細粒小児用の使用経験」
 内菌 明裕 先生（せんだい耳鼻咽喉科 院長）

3. 第36回日耳鼻鹿児島県地方部会総会ならびに学術集会 平成23年6月25日
 特別講演：「神経支配の再建をめざした喉頭麻痺の治療」
 熊本大学大学院生命科学研究部頭頸部感覚病態学分野
 教授 湯本 英二 先生
 一般演題：「下咽頭表在癌に対するビデオラリソグスコープの使用経験」
 大堀 純一郎 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）
 「自家骨にて伝音再建を行った耳小骨奇形の一例」
 早水 佳子 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）
 「鼻アレルギーにおけるティートゥリー（アロマセラピー）の有用性」
 江川 雅彦 先生（江川耳鼻咽喉科 院長）
 「喉頭浮腫を生じた成人ムンプス症例」
 林 多聞 先生（鹿児島市立病院耳鼻いんこう科）
 「ヒト乳頭腫ウイルス（HPV）陽性であった中咽頭粘表皮癌2症例における臨床像」
 西元 謙吾 先生（鹿児島医療センター 耳鼻咽喉科）

4. 第77回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会 平成23年7月14日
 特別講演1：「人工内耳・人工中耳の最新情報」
 近畿大学医学部 耳鼻咽喉科学講座 教授 土井勝美 先生
 特別講演2：「睡眠時無呼吸症候群の診断と治療」
 藤田保健衛生大学坂文種報徳會病院 耳鼻咽喉科 教授 鈴木賢二 先生
5. 第78回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会 平成23年8月18日
 特別講演1：「当科における睡眠時無呼吸症候群に対する取り組み(鼻疾患を中心に)」
 東邦大学医療センター大橋病院 耳鼻咽喉科 教授 大越 俊夫 先生
 特別講演2：「小児滲出性中耳炎の年齢による治療方針」
 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 展開医療科学講座
 耳鼻咽喉・頭頸部外科学分野 教授 高橋 晴雄 先生
6. 第79回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会 平成23年9月29日
 教育講演：「当院における鼻アレルギー・副鼻腔炎の治療」
 豊永耳鼻咽喉科医院 院長 友永 和宏 先生
 特別講演：「アレルギー性鼻炎の研究と実地臨床 ～新しいものを求めて～」
 福井大学医学部 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学 教授 藤枝 重治 先生
7. 第80回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会 平成23年10月20日
 特別講演1：「頭頸部のより良い機能と整容の再建を目指して」
 久留米大学医学部 形成外科・顎顔面外科学講座 主任教授 清川 兼輔 先生
 特別講演2：「鼻副鼻腔粘膜の難治性疾患」
 三重大学大学院医学系研究科 病態修復医学講座
 耳鼻咽喉・頭頸部外科学 教授 竹内 万彦 先生
8. 第13回上気道アレルギー疾患を考える会 平成23年11月17日
 ミニパネルディスカッション
 1. 「スギ花粉症の初期療法における鼻粘膜ヒスタミン受容体発現について」
 牧瀬 高穂 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）
 2. 「郵送法用いた2011年スギ花粉飛散ピーク期における QOL 調査の検討」
 宮之原 郁代先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）
 3. 総合討論
 特別講演：「耳鼻咽喉科からみた one airway, one disease」

横浜市立大学附属市民総合医療センター

耳鼻咽喉科 教授 石戸谷 淳一 先生

9. 第81回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会 平成24年1月19日
特別講演1:「アレルギー性結膜疾患の治療－最近のトピックス－」
東京女子医科大学 眼科 教授 高村 悦子 先生
特別講演2:「外科的治療が必要な鼻副鼻腔疾患への対応－術式の選択と手術の工夫－」
大分大学医学部耳鼻咽喉科・頭頸部外科学 講師 児玉 悟 先生
10. 第82回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会 平成24年2月22日
特別講演1:「2012年重症アレルギー対策」
関西医科大学 耳鼻咽喉科 講師 朝子 幹也 先生
特別講演2:「臨床に役立つ中耳解剖の知識－外来から手術まで－」
東京女子医科大学東医療センター 耳鼻咽喉科 教授 須納瀬 弘 先生
11. 第2回鹿児島聴覚・平衡研究会 平成24年3月1日
パネルディスカッション ～診断と治療に苦慮した症例～
「軽快憎悪を繰り返す対側型内リンパ水腫」
岩元 正弘 先生 (いわもと耳鼻咽喉科 院長)
「小児めまいの1例」
宮之原 郁代 先生 (鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科)
「右外リンパ瘻の1例」
中島 崇博 先生 (鹿児島市立病院 耳鼻いんこう科)
「耳症状発症に2年遅れて脳梗塞を起こした39歳女性」
清田 隆二 先生 (清田耳鼻咽喉科 院長)
特別講演:「加齢とめまい平衡障害」
帝京大学医学部附属溝口病院 耳鼻咽喉科 教授 室伏 利久 先生
12. 第83回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会 平成24年3月15日
特別講演1:「アレルギー性鼻炎の病態と治療」
名古屋市立大学大学院医学研究科 耳鼻咽喉・頭頸部外科学講座
准教授 鈴木 元彦 先生
特別講演2:「鼻副鼻腔内視鏡手術の最前線」
東京慈恵会医科大学 耳鼻咽喉科学講座 准教授 鴻 信義 先生

2. 第14回さくらじまフォーラム

日 時 平成23年12月15日（木） 午後7時から午後9時

場 所 鹿児島サンロイヤルホテル1F「エトワール」

講演内容：

総合司会 鹿児島大学大学院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 講師 大堀純一郎 先生
症例検討

司会 鹿児島医療センター 耳鼻咽喉科 医長 松崎勉 先生

1. 両側性有痛性耳下腺の腫脹を繰り返した症例

鹿児島大学大学院 耳鼻咽喉科頭頸部外科

井内寛之 先生, 永野広海 先生, 大堀純一郎 先生, 黒野祐一 先生

2. 口腔内真菌症を繰り返す症例への対応

あまたつクリニック 谷本洋一郎 先生

3. 早期のESSが奏功した細菌性髄膜炎症例

鹿児島生協病院 耳鼻咽喉科 積山幸祐 先生

How I Do it

テーマ 扁桃周囲膿瘍の切開・排膿瘍

司会 鹿児島市立病院 耳鼻いんこう科 部長 花牟礼 豊 先生

特別講演

『病巣感染症に対する口蓋扁桃摘出術のエビデンス』

鹿児島大学大学院耳鼻咽喉科・頭頸部外科学 教授 黒野祐一 先生

本フォーラムは、毎年各関連病院から治療に難渋した症例をもちよりカンファレンス形式で行われた。開業された先生方や関連病院の部長の先生方の貴重な意見を聴く機会となり、とても有意義であった。また、How I Do it では、扁桃周囲膿瘍の口腔所見とCT画像から、切開排膿、即時扁桃摘などの適応を判断するという企画で非常に活発な論議がなされた。特別講演でも当科での研究成果を、県下の先生方に知ってもらいたい機会であった。

3. 第11回「鼻の日」市民講座

「ハナ（鼻）の日」（日本耳鼻咽喉科学会）にちなんで「第11回 鼻の日市民講座」が以下の内容で行われた。

日 時：平成23年8月6日（土） 午後2時～3時30分

場 所：天文館アイムビル4F ホール

講演内容：

司 会 鹿児島大学病院耳鼻咽喉科 大堀純一郎 先生

①アレルギー性鼻炎のもっとも効果的な治療は？

鹿児島大学病院耳鼻咽喉科 吉福孝介 先生

②鼻出血の正しい止め方は？

鹿児島大学病院耳鼻咽喉科 川島雅樹 先生

③いびきは病気？

鹿児島大学病院耳鼻咽喉科 宮下圭一 先生

今回は、アレルギー性鼻炎、鼻出血、睡眠時無呼吸をテーマに取り上げた。参加者は45名で、みなさん熱心に聴講され、質疑も活発であった。終了時のアンケートでは、アレルギー性鼻炎の講演を目的に受講する人が多く、アレルギー週間公開講座と同様に、アレルギーに関しての関心が非常に高かった。今後も市民講座としてアレルギー性鼻炎、花粉症などを取り上げて市民の皆様へ啓発が必要と思われた。

4. 第5回耳の日ならびにアレルギー週間公開講座

日時：2012年3月4日（日）13：00～14：30

場所：鹿児島県医師会館

宮之原 郁 代

本年の市民公開講座は、一耳と鼻の健康とセルフケアと題して以下の講演を行いました。当日は、（中）日本補聴器販売店協会のご協力、赤外線補聴システムを準備しました。講座修了後に今回の講座についてのアンケート調査を行い、その結果は以下の通りでした。参加者は57名で、アンケート回収率は、93%（53名）でした。年齢性別構成では、60代にピークを認め（図1）、内容としては、難聴・耳鳴りと補聴器について

の情報をより求めていることが伺えました。今後も引き続き、耳疾患、アレルギー疾患に関する啓発活動に努めていきたいと思えます。ご協力頂きました皆様に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

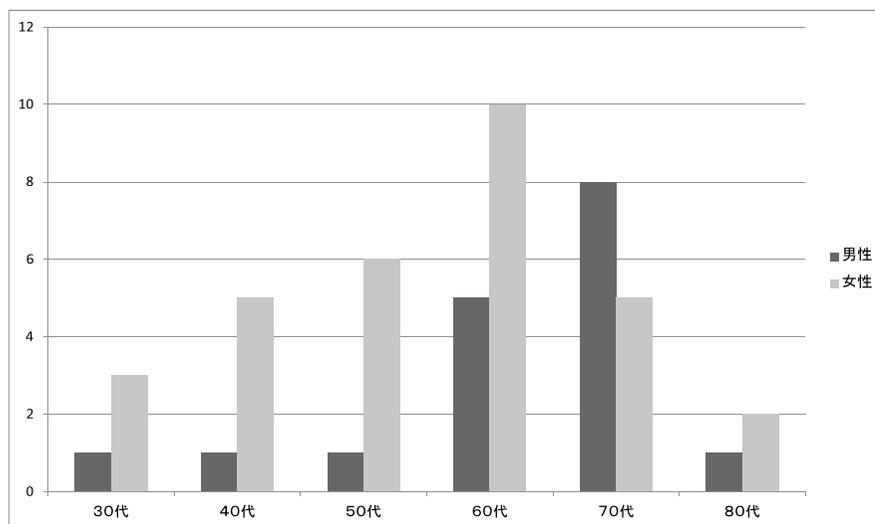


図1 年齢性別構成

*性別無回答5名

講演内容

一耳と鼻の健康とセルフケアー

- > 1. 耳のしくみと働き 鹿児島大学 耳鼻咽喉科 教授 黒野祐一先生
 - > 2. 難聴・耳鳴りと補聴器装用のコツ 鹿児島大学 耳鼻咽喉科 宮之原郁代
 - > 3. 正しく知ろう！アレルギー性鼻炎 鹿児島大学 耳鼻咽喉科 大堀純一郎先生
- ～質問コーナー～

アンケート結果

1. どのようにして、今回の講座について知りましたか。

新聞 11名 病院内のポスター 5名 フェリア 2名 リビング 6名
案内状 25名 友人の紹介 4名 徳洲会新聞 1名 ※重複回答あり

2. どの講演を目的に受講しましたか。 ※重複回答あり

耳のしくみと働き 26名 難聴・耳鳴りと補聴器装用のコツ 36名
アレルギー性鼻炎 28名

3. 講演内容はいかがでしたか。

わかりやすかった 36名 ややわかりにくい 7名
むずかしすぎる 0名 無回答 10名

4. 講演時間, 日程についてお聞きします。

講演時間：長い 0名 ちょうど良い 44名 短い 4名 無回答 5名
日 程：土曜午後が良い 17名 日曜午後で良い 31名
平日夜が良い 1名 いつでも良い 1名
無回答 5名 ※重複回答あり

5. これまでに参加されたことはありますか？

はい 1回：10名 2回：12名 3回：2名 回数なし：3名
いいえ 26名

平成24年1月14日、鹿児島県医師会館にて「鹿児島大学大学院耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室同門会総会ならびに学術講演会」が開催された。同門会総会の参加者は、同門会会員総数110名中39名（委任状36名）で、山本 誠会長の司会で進められた。今回参加者が少なかったため、今後参加者を増やすための工夫について総会で話し合われた。また、平成24年度の予算案、事業予定について報告され、承認された。

今回の同門会の概要は以下のように開催された。特別講演では、昨年日本医科大学の臨床教授に就任された同門会会員 松根 彰志先生をお招きして凱旋講演を行っていた。

- 16時～17時 役員会
- 17時～18時 同門会総会および写真撮影
- 18時～19時 学術講演会 一般演題
- 19時～20時 学術講演会 特別講演
- 20時～ 新年会も兼ねた懇親会

一般演題（18:00～19:00）

座長 花牟禮 豊 先生（鹿児島市立病院 耳鼻いんこう科）

1. アレルギー性副鼻腔炎に対するマクロライドと抗ヒスタミン薬の併用療法の有用性
吉福 孝介（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）
2. 中・下咽頭癌に対する経口腫瘍切除術の検討
大堀純一郎（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）
- 座長 吉福 孝介 先生（鹿児島大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科）
3. 冠状切開法による前頭洞根治術の経験
西元 謙吾, 松崎 勉（鹿児島医療センター 耳鼻咽喉科）
4. 前頭蓋底・眼窩側への著名な進展を示したアレルギー性真菌性副鼻腔炎症例
花牟禮 豊, 高木 実, 中島 崇博, 林 多聞
（鹿児島市立病院 耳鼻いんこう科）
5. 声帯麻痺症例における画像診断の有効性
福岩 達哉（ふくい耳鼻咽喉科クリニック 院長）

特別講演 (19:00~20:00)

座長 山本 誠 先生 (同門会会長 山本耳鼻咽喉科 院長)

「鼻副鼻腔炎の臨床と病態研究」

日本医科大学 臨床教授

武蔵小杉病院 耳鼻咽喉科 部長 松根彰志 先生



鹿児島大学大学院耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室同門会 平成24年1月14日 於 県医師会館

1. 学校保健（統計報告）

平成23年4月から6月にかけて、当科において鹿児島県下の以下の耳鼻咽喉科学校検診を行った。

【対象地域】

鹿児島市，阿久根市，垂水市，西之表市，松山町（志布志市），財部町（曾於市），大崎町（曾於郡），輝北町（鹿屋市）

【受診者数】

小学生4,297名，中学生2,319名

【対象疾患】

耳垢栓塞，浸出性中耳炎，慢性中耳炎，鼻中隔彎曲症，鼻アレルギー，慢性鼻炎，慢性副鼻腔炎，扁桃肥大の9疾患

【結果】

疾患別の有病率については、ここ数年の傾向どおり、鼻アレルギーが圧倒的に多く約1割であった。ついで耳垢栓塞，慢性副鼻腔炎の順であった（図1）。耳疾患は学年とともに有病率は減少傾向であった（図2）。鼻疾患では、鼻アレルギーはどの学年でも1割強の有病率であった（図3）。扁桃疾患は学年とともに減少傾向であった（図4）。

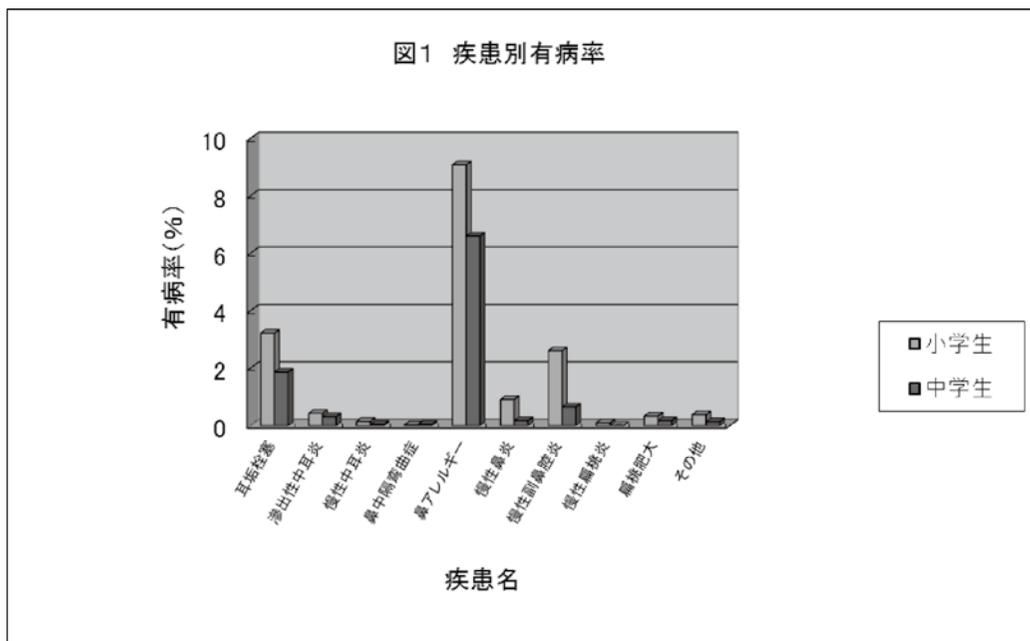


図2 学年別耳疾患有病率

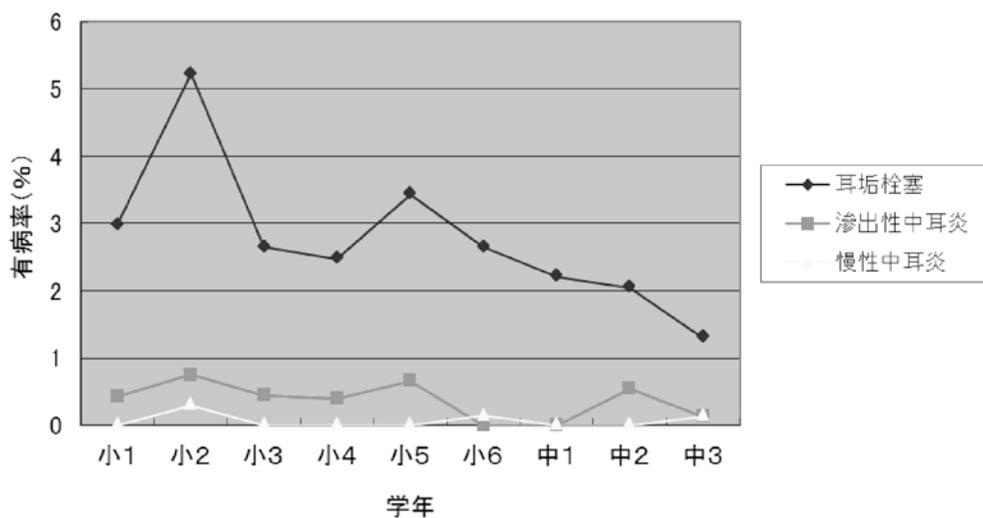


図3 学年別鼻疾患有病率

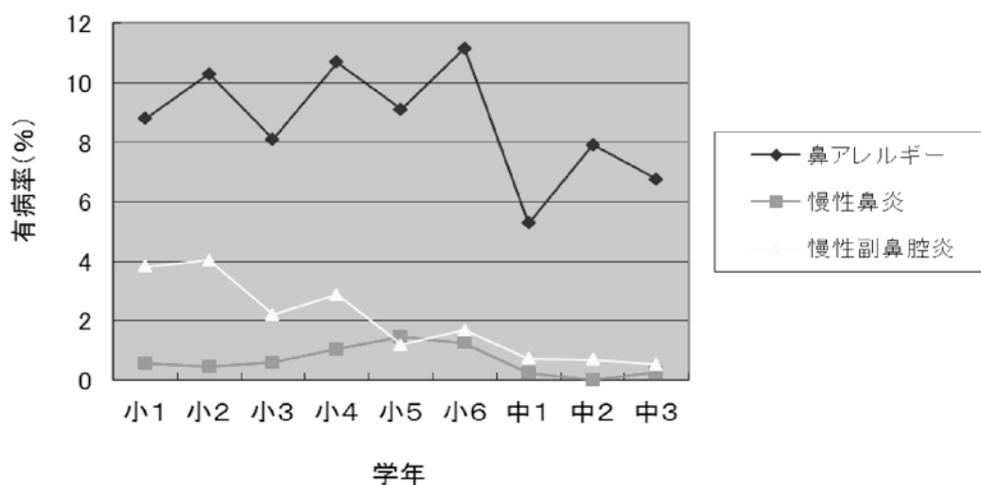
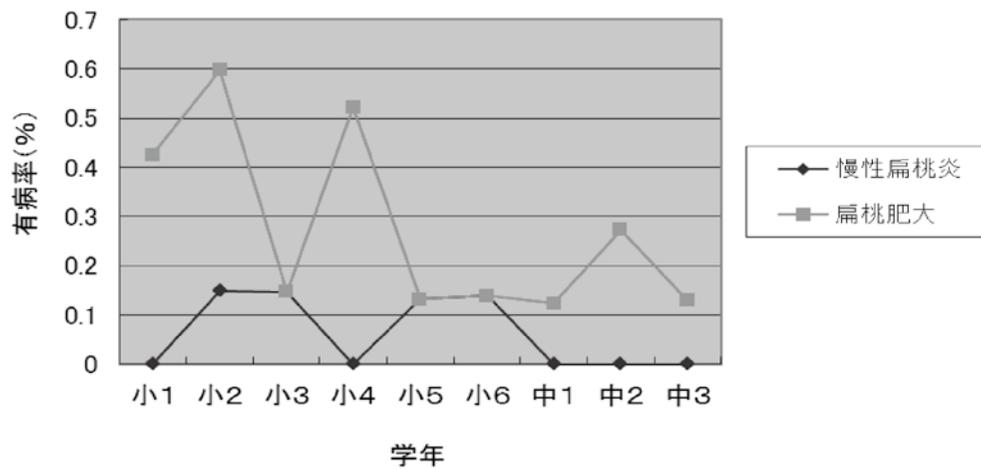


図3 学年別扁桃疾患有病率



難聴・耳鳴・めまい外来

宮之原 郁 代

2010年6月に、当科では完全予約制になり全例紹介患者となりました。これらの難聴・耳鳴・めまい症例に対し、詳細な聴覚検査、前庭機能検査を行い、診断・治療方針を決定しています。人工内耳候補者の評価、術後の（リ）ハビリテーション、補聴器フィッティング、TRT療法などを行なうとともに、特に、近年は、以下を活用した診断、治療に積極的に取り組んでおります。

1) 3T-MRIによる内耳画像診断

院内ならびに近接する施設にあわせて3台の3T-MRI導入されております。微細な内耳病態の評価を診断・聴覚管理に活用しています。

2) 先天性難聴の遺伝子診断

当科では、これまで「難聴の遺伝子診断」に関して信州大学との全国共同研究を行ってきており、2011年1月から先進医療（共同実施）、今年度より保険診療として、難聴の遺伝子診断を行うことができるようになりました。

3) 突発性難聴、内リンパ水腫病態に対する鼓室内注入療法

メニエール病に対するゲンタマイシン鼓室内注入療法、突発性難聴、メニエール病に対するステロイド鼓室内注入療法を施行できる体制を整えております。

今後も引き続き聴覚、めまい分野における診療の充実を図っていききたいと思います。

H23. 4. 1 ~ H24. 3.30 H23年度 手術実績

術式		術式			
耳	鼓室形成術(乳突洞削開術含む)	18	喉頭	喉頭腫瘍摘出術(直達鏡)	22
	鼓膜チューブ留置術(鼓膜切開術含む)	9		喉頭嚢腫摘出術	15
	外耳道腫瘍摘出術	3		声帯結節(ポリープ)切除術	9
	耳介腫瘍摘出術	2		喉頭全摘出術	3
	先天性耳瘻管摘出術	2		喉頭悪性腫瘍手術	2
	副耳切除術	1	甲状腺	甲状腺部分切除術	4
	アブミ骨手術	1		甲状腺悪性腫瘍手術	3
	顔面神経減圧手術	1	唾液腺	耳下腺腫瘍摘出術	17
				顎下腺摘出術	7
鼻	鼻内視鏡下副鼻腔手術	66		耳下腺悪性腫瘍手術	6
	術後性上顎のう胞摘出術	20		顎下腺悪性腫瘍手術	2
	鼻中隔矯正術	19		顎下腺腫瘍摘出術	2
	粘膜下甲介骨切除術	15		ガンマ腫瘍摘出術	2
	鼻副鼻腔腫瘍摘出術	9		唾石摘出術	1
	翼突管神経切除術	4	頸部	頸部郭清術	23
	鼻茸切除術	2		リンパ節摘出術	13
	鼻骨骨折徒手整復術	2		頸のう摘出術	6
	後鼻孔ポリープ切除術	1		頸動脈小体腫瘍手術	1
	鼻副鼻腔悪性腫瘍手術	1	食道	食道異物摘出術	2
上顎全摘出術	1		気管切開術	14	
眼窩	眼窩吹き抜け骨折観血的整復術	1		気管形成術	1
	眼窩内異物除去術	1		気管縫合術	1
顔面	頬骨骨折観血的整復術	3		気管孔狭窄拡大術	1
	上顎骨骨折観血的整復術	2		気管支異物摘出術	5
	上顎骨良性腫瘍摘出術	1	皮膚	皮膚皮下腫瘍摘出術	3
口腔	舌悪性腫瘍手術	5			
	口腔底膿瘍切開術	3			
	口腔底悪性腫瘍手術	1			
	口唇腫瘍摘出術	1			
	口唇悪性腫瘍手術	1			
	頬粘膜腫瘍摘出術	1			
咽頭	口蓋扁桃摘出術	97			
	下咽頭腫瘍摘出術(経口腔)	22			
	アデノイド切除術	11			
	副咽頭腫瘍摘出術	6			
	咽頭異物摘出術	6			
	咽後膿瘍切開術	5			
	喉頭・下咽頭腫瘍手術	4			
	咽頭瘻閉鎖術	3			
	中咽頭腫瘍手術	3			
	咽頭悪性腫瘍手術	3			
	いびきに対する咽頭形成術	2			
	過長茎状突起切除術	3			
	扁桃周囲膿瘍切開術(穿刺含む)	2			
	咽頭腫瘍摘出術	1			
	食道直達鏡検査	3			

533

Ⅸ. 病理集計

病理集計
2011年4月-2012年3月

	悪性	件数	良性	件数
喉頭腫瘍	SCC	18	schwanoma	1
	他	2	neurofibroma	1
			papilloma	1
甲状腺腫瘍	papillary carcinoma	5	adenoma	1
	他	0	adenomatous goiter	1
上咽頭腫瘍	SCC	1		0
	他	0		
中咽頭腫瘍	SCC	12	papilloma	1
	他	0	lymphoepithelial cyst	1
下咽頭腫瘍	SCC	21	papilloma	2
	他	0		
舌腫瘍	SCC	7	epidermal cyst	1
	他	0		
口腔腫瘍	SCC	0		0
	他	0		
口腔底腫瘍	SCC	0		0
	他	0		
歯肉腫瘍	SCC	2		0
	他	0		
軟口蓋腫瘍	SCC	2		0
	他	0		
上顎腫瘍	SCC	4	myxoma	1
	他	0	adenomatoid odontogenic adenoma	1
鼻腔腫瘍	SCC	3	inverted papilloma	2
	nuroblastoma	1	pleomorphic adenoma	1
	melanoma	2	chordoma	1
	他	1	papilloma	3
耳下腺腫瘍	SCC	1	pleomorphic adenoma	20
	Salivary duct carcinoma	1	Warthin tumor	10
	mucoepidermoid carcinoma	1		
	undifferentated carcinoma	1		
		0	pleomorphic adenoma	1
聴器腫瘍	SCC	1	hemangioma	1
	他	0		
悪性リンパ腫		6		0
合計		92		51

総検体数	1465
------	------

(平成24年3月現在)

文部科学省科学研究費

基盤研究 (C)

経皮免疫による上気道粘膜免疫応答の誘導

研究代表者 早水 佳子

分担者 黒野 祐一 宮下 圭一 永野 広海 牧瀬 高穂

若手研究 (B)

好酸球性副鼻腔炎における好酸球活性化機序の解明

研究代表者 吉福 孝介

若手研究 (B)

粘膜ワクチンによる I 型アレルギーの誘導機序とその制御に関する研究

研究代表者 宮下 圭一

若手研究 (B)

スギ花粉症初期療法が鼻粘膜ヒスタミン H1受容体発現に及ぼす効果と機序に関する研究

研究代表者 牧瀬 高穂

厚生労働省科学研究費補助金

免疫療法による花粉症予防と免疫療法のガイドライン作成にむけた研究

主任研究者 岡元 美孝 (千葉大学 耳鼻咽喉科・頭頸部腫瘍学)

分担研究者 黒野 祐一

1. 原 著

- (1) 黒野祐一, 森山一郎, 茶園篤男, 友永和弘, 大堀純一郎, 松根彰志
「上気道感染症に対するガレノキサシンの (CRNX) 投与後早期の治療効果に関する検討」
耳鼻咽喉科展望 54(1):49-61, 2011
- (2) 吉福孝介, 大堀純一郎, 黒野祐一
「ACE阻害剤による口腔底および顎下部の晩発性血管浮腫例」
耳鼻臨床 104(4):285-289, 2011
- (3) 永野広海, 馬越瑞夫, 牧瀬高穂, 川島雅樹, 原田みずえ, 松根彰志, 黒野祐一
「耳鳴を主訴とした鼓膜ヤケヒョウヒダニ寄生例」
耳鼻臨床 104(4):251-254, 2011
- (4) K.Sekiyama, J.Ohori, S.Matsune, Y.Kurono
「The role of vascular endothelial growth factor in pediatric otitis media with effusion」
Auris Nasus Larynx 38:319-324, 2011
- (5) 永野広海, 馬越瑞夫, 原田みずえ, 大堀純一郎, 黒野祐一
「下咽頭血管腫の2例」
耳鼻臨床 104(5):353-357, 2011
- (6) 永野広海, 馬越瑞夫, 川島雅樹, 早水佳子, 大堀純一郎, 吉福孝介, 黒野祐一
「唾液管内視鏡を用いて診断した両側ステノン管狭窄の2例」
耳鼻臨床 104(6):435-440, 2011
- (7) 大堀純一郎, 馬越瑞夫, 黒野祐一
「歯科治療中に発症した縦隔気腫の1例」
日本口腔・咽頭科学会 24(2):199-204, 2011
- (8) 早水佳子, 黒野祐一

- 「ECM1遺伝子変異を伴う皮膚粘膜ヒアリノーシス例」
耳鼻臨床 104(8): 575-580, 2011
- (9) 西元謙吾, 松崎 勉, 早水佳子, 大堀純一郎, 牧瀬高穂, 黒野祐一
「蝶形骨洞内異所性下垂体腺腫の臨床的検討」
耳鼻臨床 104(8):559-563, 2011
- (10) 早水佳子, 黒野祐一
「鼻腔血管周囲細胞腫に起因する腫瘍性骨軟化症例」
耳鼻臨床 104(9):631-636, 2011
- (11) M.Kawabata, Y.Kurono
「Polyinosine-polycytidylic acid enhances cellular adherence of Streptococcus pneumoniae」
Laryngoscope. 121(11):2443-2448, 2011
- (12) 早水佳子, 大堀純一郎, 黒野祐一
「上顎に発生した juvenile trabecular ossifying fibroma の 1 症例」
小児耳鼻咽喉科 32(3):347-351, 2011
- (13) I.Miyanohara, K.Miyashita, K.Takumi, M. Nakajo, Y.Kurono
A case of cochlear nerve deficiency without profound sensorineural hearing loss.
Otol Neurotol. 2011 32:529-32.
- (14) 永野広海, 黒野祐一
「生活習慣病が味覚に与える潜在的な影響について
- 地域住民における潜在的味覚低下に関する調査 -」
耳鼻臨床 105(1):33-40, 2012
- (15) 宮之原郁代, 宮下圭一, 黒野祐一
「HIV 感染に合併した内耳梅毒の 1 例」
Otology Japan 21: 821-826, 2011

2. 総 説

- (1) 黒野祐一
 特集 耳鼻咽喉科感染症の完全マスター II. 病原体をマスターする
 3. ウイルス感染症 10) R S ウイルス
 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 83(5)増刊号：201-205, 2011
- (2) 黒野祐一
 特集 私の処方箋
 総論 点鼻・噴霧・吸入薬の使い方
 JOHNS 27(9):1302-1303, 2011
- (3) 黒野祐一
 特集 気道アレルギー疾患の早期診断と早期介入
 アレルギーの臨床 31(11)：42(976)-46(980), 2011
- (4) 黒野祐一
 特集 耳鼻咽喉科領域のウイルス・細菌・真菌感染症治療戦略
 急性喉頭蓋炎
 MB ENT 131:135-140, 2011
- (5) 黒野祐一
 疑問解決 小児の診かた 鼻吸引の有効性はどう考えられていますか
 小児内科 43増刊号590-592, 2011
- (6) 黒野祐一
 アレルギー性鼻炎に対する抗ヒスタミン薬の用い方
 日本医事新報 別刷4570:73-77, 2011
- (7) 黒野祐一
 特集 抗アレルギー薬の現状と近未来
 次世代の抗ヒスタミン薬
 アレルギーの臨床 31(14):42(1256)-46(1260), 2011

- (8) 黒野祐一
 特集 花粉症の疑問に答える スギ花粉症に自然治癒はあるのか？
 JOHNS 28(1): 27-29, 2012
- (9) 黒野祐一
 特集 / 最新のアレルギー診療
 アレルギー疾患診断・治療ガイドライン活用のポイント アレルギー性鼻炎
 臨床と研究 89(3):16(298)-20(302), 2012
- (10) 黒野祐一
 感染症と抗菌薬の使い方－多剤耐性菌感染症の予防から治療まで－
 耳鼻咽喉科領域
 診断と治療 100(3):86(408)-90(412), 2012

3. 座 談 会

- (1) 黒野祐一, 平川勝洋, 飯野ゆき子
 アレルギー性鼻炎に合併する副鼻腔陰影の取り扱い
 －アレルギー性鼻副鼻腔炎の治療方針－
 THE JAPANESE JOURNAL OF ANTIBIOTICS (64)6: 345-353, 2011

4. 国内学会発表

- (1) 特別講演
 九州大学医学部臨床講義 平成23年4月15日 (福岡市)
 「上気道の免疫・アレルギー疾患」
 黒野祐一
- 熊本大学医学部臨床講義 平成23年4月27日 (熊本市)
 「上気道疾患と粘膜免疫」
 黒野祐一
- 第86回医科研究会 平成23年6月15日 (鹿児島市)
 「一般医に必要な耳鼻咽喉科の知識～外傷と感染症シリーズ～基本的な手技を含めて～」
 大堀純一郎

埼玉西部地区耳鼻咽喉科領域感染症 学術講演会 平成23年6月30日（川越市）

「急性上気道感染症の診療における留意点

－ニューキノロン系抗菌薬の位置づけ－

黒野祐一

第9回京阪神耳鼻咽喉科臨床懇話会 平成23年7月2日（大阪市）

「副鼻腔炎の治療戦略－副鼻腔炎診療ガイドラインにもとづく薬剤の選択－」

黒野祐一

大分大学医学部臨床講義 平成23年7月12日（大分市）

「口腔・咽頭癌」

黒野祐一

第13回福岡県耳鼻咽喉科学校医研修会 平成23年7月23日（福岡市）

「小児鼻アレルギーの診療における留意点」

黒野祐一

愛知県耳鼻咽喉科医会名古屋地区研修会 平成23年8月27日（名古屋市）

「急性上気道感染症に対するニューキノロン系抗菌薬の位置づけ」

黒野祐一

周南感染症講演会 平成23年9月3日（周南市）

「急性上気道感染症の治療におけるキノロン系抗菌薬の位置づけ」

黒野祐一

出水郡医師会学術講演会 平成23年9月9日（出水市）

「副鼻腔炎について」

吉福孝介

日医生涯教育協力講座セミナー「地域医療と予防接種」 平成23年9月10日（鹿児島市）

「肺炎球菌ワクチンの意義－耳鼻咽喉科の立場から－」

黒野祐一

三重県耳鼻咽喉科学術講演会 平成23年9月15日 (津市)

「副鼻腔炎の病態とその治療戦略」

黒野祐一

日本医師会生涯教育講座 学術講演会 平成23年10月6日 (釧路市)

「日常診療における副鼻腔炎と咳嗽の診方」

黒野祐一

島根大学医学部講義 平成23年10月11日 (出雲市)

「鼻科領域の疾患と治療－薬物療法から鼻内視鏡手術まで－」

黒野祐一

第8回城東地区耳鼻咽喉科臨床懇話会 平成23年10月22日 (東京都)

「アレルギー性鼻炎の診断・治療における留意点」

黒野祐一

学術講演会 花粉症治療～抗炎症療法のすすめ～ 平成23年10月27日 (東京都)

「花粉症の治療における抗ロイコトリエン薬の位置づけ」

黒野祐一

第22回補聴器講習会 平成23年11月18日 (鹿児島市)

「高齢化社会における補聴器の積極的活用―耳鼻咽喉科医の立場から―」

宮之原郁代

耳鼻科感染症ワークショップ 平成23年11月26日 (高槻市)

「急性上気道感染症の診療における留意点～ニューキノロン系抗菌薬の位置づけ～」

黒野祐一

第65回関西耳鼻咽喉科アレルギー研究会 平成23年12月17日 (大阪市)

「アレルギー性鼻炎遷延化の要因とその対応」

黒野祐一

武蔵小杉耳鼻咽喉科セミナー 平成24年1月7日 (川崎市)

「急性上気道感染症に対するニューキノロン系抗菌薬の位置づけ」

黒野祐一

県南地区 学術講演会 2012 平成24年1月18日 (つくば市)

「花粉症シーズン到来～どの薬を使う？それはなぜ？～」

黒野祐一

鼻アレルギー講演会 in 北和 平成24年1月28日 (奈良市)

「花粉症シーズン到来～どの薬剤を使う？それはなぜ？～」

黒野祐一

Johoku Allergy Seminar 平成24年1月31日 (東京都)

「花粉症シーズン到来～どの薬剤を使う？それはなぜ？～」

黒野祐一

埼玉アレルギー研究会 平成24年2月1日 (越谷市)

「花粉症シーズン到来～どの薬剤を使う？それはなぜ？～」

黒野祐一

玉名郡市医師会講演会 平成24年2月3日 (熊本市)

「日常診療における副鼻腔炎と咳嗽の診方」

黒野祐一

徳島アレルギー性鼻炎講演会 平成24年2月8日 (徳島市)

「アレルギー性鼻炎・花粉症の治療における抗ロイコトリエン薬の位置付け」

黒野祐一

学術講演会 アレルギー性鼻炎治療戦略 2012 平成24年2月9日 (福岡市)

「アレルギー性鼻炎遷延化の要因とその対応」

黒野祐一

延岡医学会 講演会 平成24年2月10日 (延岡市)

「花粉症シーズン到来～どの薬を使う？それはなぜ？～」

黒野祐一

花粉症学術講演会 平成24年2月18日 (浜松市)

「アレルギー性鼻炎の診断・治療における留意点」

黒野祐一

香川花粉症学術講演会 平成24年2月23日 (高松市)

「アレルギー性鼻炎の診断・治療における留意点」

黒野祐一

第267回北九州耳鼻咽喉科臨床懇話会 平成24年3月23日 (北九州市)

「アレルギー性鼻炎 遷延化の要因とその対応」

黒野祐一

(2) シンポジウム

第50回日本鼻科学会総会ならびに学術講演会 平成23年12月1日～3日 (岡山市)

副鼻腔炎手術－術式と術後強化基準の作成－

新たな術式作成の意義と経緯

黒野祐一

(3) ランチョンセミナー

第112回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会 平成23年5月19日～21日 (京都市)

「遷延するアレルギー性鼻炎の病態と治療」

黒野祐一

第73回耳鼻咽喉科臨床学会総会・学術講演会 平成23年6月23日～24日 (松本市)

「アレルギー性鼻炎の治療における抗ヒスタミン薬の位置づけ」

黒野祐一

11th Japan-Taiwan Conference on Otolaryngology-Head and Neck Surgery

Kobe, Japan, Dec. 8-9, 2011

「Pathological Diversity of Chronic Sinusitis and its Managements」

Y. Kurono

第24回日本喉頭科学会総会・学術講演会 平成24年3月8日～9日 (金沢市)

副鼻腔炎と咳嗽－その診断と治療－

黒野祐一

(4) 教育講演

XIV IRS 14th International Rhinologic Society

XXX ISIAN 30th International Symposium on Infection and Allergy of the Nose

Tokyo, Japan Sep.20-23 ,2011

「Impact of Allergic Rhinitis on Persistent Rhinosinusitis」

Y. Kurono

第48回日本小児アレルギー学会・第16回アジア太平洋小児アレルギー呼吸器免疫学会

平成23年10月28日～30日 (福岡市)

「小児アレルギー性鼻炎の診療における留意点」

黒野祐一

第61回日本アレルギー学会秋季学術大会 平成23年11月10日～12日 (東京都)

「アレルギー性鼻炎遷延化の要因とその対応」

黒野祐一

(5) 一 般

第23回日本喉頭科学会総会・学術講演会 平成23年4月21日～23日 (旭川市)

「急性喉頭蓋炎を契機に発見された小児喉頭蓋嚢胞症例」

牧瀬高穂, 黒野祐一

第23回日本アレルギー学会春季臨床大会 平成23年5月14日～15日 (千葉市)

「性格特性がスギ花粉症舌下免疫療法の効果に与える影響について」

宮之原郁代, 松根彰志, 牧瀬高穂, 岡本美孝, 黒野祐一

第112回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会 平成23年5月19日～21日 (京都市)

「ヒト鼻茸線維芽細胞の eotaxin 産生に対するステロイドの影響」

吉福孝介, 松根彰志, 原田みずえ, 大堀純一郎, 黒野祐一

「扁桃周囲膿瘍に対する即時扁桃摘」

馬越瑞夫, 大堀純一郎, 吉福孝介, 早水佳子, 原田みずえ, 川畠雅樹, 牧瀬高穂,

永野広海, 松根彰志, 黒野祐一

第6回日本小児耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会

平成23年6月16日～17日（さいたま市）

「上顎に発生した juvenile trabecular ossifying fibroma の1症例」

早水佳子，黒野祐一

第35回日本頭頸部癌学会 平成23年6月9日～10日（名古屋市）

「咽頭後間隙に発生した脂肪肉腫の一例」

大堀純一郎，宮下圭一，吉福孝介，黒野祐一

「下咽頭癌に対する TPF 療法の有効性について」

宮下圭一，大堀純一郎，黒野祐一

第73回耳鼻咽喉科臨床学会総会・学術講演会 平成23年6月23日～24日（松本市）

「嚥下障害を主訴とした Ramsay Hunt 症候群」

積山幸祐，黒野祐一

「両側ステノン管狭窄の2例に対する唾液管内視鏡の使用経験」

永野広海，大堀純一郎，吉福孝介，黒野祐一

「周産期に急速な増大を認めた鼻腔感染性肉芽腫症例」

牧瀬高穂，吉福孝介，黒野祐一

第26回九州連合地方部会学術講演会 平成23年7月9日～10日（久留米市）

「Phosphorylcholine を用いた経皮免疫について」

永野広海，馬越瑞夫，牧瀬高穂，早水佳子，宮下圭一，黒野祐一

「佐藤式彎曲型咽喉頭直達鏡を用いて摘出した下咽頭異物の1例」

馬越瑞夫，永野広海，大堀純一郎，川島雅樹，黒野祐一

第18回マクロライド新作用研究会 平成23年7月15日～16日（東京都）

「アレルギー性鼻副鼻腔炎に対するマクロライドと抗ヒスタミン薬併用療法」

吉福孝介，黒野祐一，積山幸祐，茶園篤男，首藤 純，福岩達哉

第10回鹿児島めまい研究会 平成23年7月21日（鹿児島市）

「両側半規管機能低下を呈した HIV 感染に合併した内耳梅毒の1例」

宮之原郁代，宮下圭一，牧瀬高穂，原田みずえ，黒野祐一

第41回日本耳鼻咽喉科感染症研究会・第35回日本医用エアロゾル研究会

平成23年9月2日～3日（東京都）

「扁桃周囲膿瘍におけるLVFX500mgの扁桃組織移行性の検討」

大堀純一郎，吉福孝介，早水佳子，黒野祐一

「肺炎球菌の中耳粘膜上皮接着についての検討」

川島雅樹，黒野祐一

第24回日本口腔・咽頭科学会総会学術講演会 平成23年9月8日～9日（広島市）

「口蓋扁桃におけるホスホリルコリン特異的抗体産生と腎症の予後」

黒野祐一，大堀純一郎，川島雅樹，馬越瑞夫，牧瀬高穂

「コレラトキシン経皮免疫による口腔粘膜免疫応答の誘導」

永野広海，馬越瑞夫，牧瀬高穂，黒野祐一

第5回九州頭頸部癌フォーラム 平成23年11月5日（福岡市）

「扁平上皮癌転化をきたした鼻腔内反性乳頭腫の一例」

宮下圭一，大堀純一郎，黒野祐一

第63回日本気管食道科学会総会ならびに学術講演会

平成23年11月10日～11日（名古屋市）

「佐藤式彎曲型咽喉頭直達鏡を用いた下咽頭異物摘出術の有用性」

馬越瑞夫，永野広海，大堀純一郎，川島雅樹，黒野祐一

第21回日本耳科学会総会・学術講演会 平成23年11月24日～26日（宜野湾市）

「純音聴力閾値に左右差のない聴神経腫瘍症例の検討」

宮之原郁代，宮下圭一，黒野祐一

「中耳放線菌症の一例」

積山幸祐，黒野祐一

第50回日本鼻科学会総会ならびに学術講演会 平成23年12月1日～3日（岡山市）

セッション

第47回鼻科学基礎問題研究会 慢性鼻・副鼻腔炎症の難治化因子とその制御

「好酸球性副鼻腔炎におけるVEGFの関与」

大堀純一郎

第22回日本頭頸部外科学会総会・学術講演会 平成24年1月26日～27日 (福島市)

「頸部に発生した悪性線維性組織球腫の1症例」

吉福孝介, 馬越瑞夫, 黒野祐一

「下咽頭癌に対する経口的腫瘍切除の検討」

大堀純一郎, 宮下圭一, 馬越瑞夫, 牧瀬高穂, 川島雅樹, 早水佳子, 吉福孝介

第30回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会 平成24年2月16日～18日 (大津市)

「好酸球性副鼻腔炎由来鼻粘膜における VEGF 発現の検討」

大堀純一郎, 吉福孝介, 原田みずえ, 黒野祐一

「可溶性カチオン化ホスホリルコリンによる舌下・経鼻免疫応答の誘導」

早水佳子, 永野広海, 宮下圭一, 馬越瑞夫, 黒野祐一

「コレラトキシン経皮免疫による粘膜免疫応答の誘導」

永野広海, 馬越瑞夫, 牧瀬高穂, 早水佳子, 宮下圭一, 黒野祐一

第24回日本喉頭科学会総会・学術講演会 平成24年3月8日～9日 (金沢市)

「一側の声帯麻痺をきたした再発性多発性軟骨炎例」

永野広海, 谷本洋一郎, 川島雅樹, 大堀純一郎, 吉福孝介, 黒野祐一

「喉頭の粘膜病変を伴った水疱性類天疱瘡症例」

牧瀬高穂, 黒野祐一

第24回気道病態研究会 平成24年3月3日 (東京都)

「好酸球性副鼻腔炎由来鼻茸培養細胞における VEGF 発現の検討」

大堀純一郎, 吉福孝介, 黒野祐一

5. 国際学会発表

10th International Symposium Recent Advances in Otitis Media

New Orleans, USA June 5-9, 2011

「Immunological difference in upper respiratory tracts between sublingual and intranasal immunizations」

Y.Hayamizu, N.Tanaka, K.Miyashita, Y.Kurono

「Pretreatment of epithelial cells with Poly(I:C) enhances the adherence of Streptococcus pneumoniae」

M.Kawabata, Y.Kurono

XIV IRS 14th International Rhinologic Society

XXX ISIAN 30th International Symposium on Infection and Allergy of the Nose

Tokyo, Japan Sep.20-23, 2011

「Efficacy if steroid treatment for the secretion of eotaxin from cultured fibroblasts of nasal polyps」

K.Yoshifuku, J.Ohori, M.Harada, Y.Kurono

「Pretreatment with Pranlukast reduces the infiltration eosinophils into nasal mucosa of patients with Japanese」

T.Makise, Y.Kurono

11th Japan-Taiwan Conference on Otolaryngology-Head and Neck Surgery

Kobe, Japan, Dec. 8-9, 2011

「Pretreatment of epithelial cells with poly (I:C) enhances the adherence of Streptococcus pneumoniae」

M.Kawabata, Y.Kurono

「Antihistamines redused H1R mRNA expression in mucosa of patients with Japanese cedar pollinosis」

T.Makise, J.Ohori, Y.Kurono

The 14th Japan-Korea Joint Meeting of Otorhinolaryngology-Head and Neck Surgery

Kyoto Japan April 12-14, 2012

「Efficacy of combined treatment with a macrolide and an antihistamine for patients with nasal allergy complicated with chronic rhinosinusitis」

K.Yoshifuku,

「Transcutaneous immunization with cholera toxin in BALB/c mice」

H.Nagano, M.Umakoshi ,T.Makise, Y.Hayamizu, Y.Kurono

1. 新入局員紹介

はじめまして

今年度鹿児島大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科に入局しました井内寛之です。

出身は鹿児島大学で鹿児島大学プログラムの研修を経て入局いたしました。

耳鼻科には5年生の時の舌癌の手術を見たときから、興味があり浮気することなく無事にたどり着きました。

趣味はゴルフで夜な夜なクラブを振り回しています。

これからは後輩の勧誘を頑張りたいと思います。

今後ともよろしくお願い申し上げます。



2. 医局人事（平成24年4月現在）

教授	黒野祐一
講師	吉福孝介, 大堀純一郎
助教	早水佳子, 原田みずえ, 宮下圭一, 永野広海
医員	川島雅樹, 牧瀬高穂, 馬越瑞夫, 井内寛之
大学院生	川島雅樹, 牧瀬高穂, 永野広海

医局長	大堀純一郎
外来医長	原田みずえ
病棟医長	宮下圭一

関連病院（平成24年4月現在）

鹿児島医療センター	西元謙吾
国立療養所星塚敬愛園	宮之原郁代
鹿児島生協病院	積山幸祐
藤元早鈴病院	森園健介
あまたつクリニック	谷本洋一郎
鹿児島市立病院	高木 実

3. 学会報告

第23回日本喉頭科学会・学術講演会

牧瀬 高穂

4月21日から2日間、北海道旭川市で行われた第23回日本喉頭科学会・学術講演会に参加させていただきました。喉頭疾患について幅広く勉強するには最適の学会で、可能な限り参加するようにしています。今回は、「急性喉頭蓋炎を契機に発見された小児喉頭蓋嚢胞症例」のタイトルで発表しました。たくさんの意見をいただくことができ、大変有意義な発表となりました。学会終了後は北海道の海の幸を堪能することもでき、これも良い経験となりました。

第23回日本アレルギー学会春季臨床大会

2011年5月14-15日

幕張メッセ国際会議場，国際展示場および
ホテルニューオータニ幕張（千葉市）

宮之原 郁 代

震災の直後の開催であったことから、会長緊急企画として「震災時におけるアレルギー診療の問題：東北地方太平洋沖地震・現地からの報告」があり、食物アレルギーを持つ患者に、アレルギー対応の食料が配置されず、混乱を来した現状など報告されました。シンポジウムでは、「アレルギーマーチの進展予防を目指して」、「免疫療法」、「スギ花粉症に関する最新情報 -病態から治療まで-」などを聞くことができました。今回は、特に「アレルギー臨床における各分野の機能的融合」というメインテーマで開催されましたが、アレルギー疾患は、複数科が関わる病態であることが多く、多分野の情報や知見を、得られるようなプログラムが、今後より求められてくるのであらうと思われました。

第112回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会

馬 越 瑞 夫

5月19日から21日まで京都で開催された日耳鼻総会に参加した。はずかしながら初めての全国学会参加であった。いつも鹿児島でお世話になっている諸先輩方とも多数お会いできた。私の発表は最終日の扁桃セッションの1番目であった。予想してなかった質問答えられない私に救いの手を差し伸べていただいた吉福先生にはただ感謝であった。また初夏の京都（暑い）をサンダルで走って駆け抜けた寺巡り、そして鴨川の清涼、夕景、京都タワー等忘れえぬ思い出となった。もちろん全国学会に相応しい知見を得ることができた。こうしてまた夏が訪れる。

第6回日本小児耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会

早 水 佳 子

本学会は、自治医科大学付属さいたま医療センター耳鼻咽喉科・飯野ゆき子会長のもと、平成23年6月16日・17日の2日間、大宮ソニックシティで開催されました。当教室からは、黒野教授と私の2人で参加させて頂きました。

この度の東日本大震災の影響で、開催出来ないのではないかと不安もあったのですが、無事に滞りなく行われました。ただ、鹿児島からの移動の際には、震災の影響を生々しく感じることもあり、3か月経ったとはいえども、節電を意識して、かつて3本並列で動いていたエスカレーターは1本しか稼働せず、照明も半分点灯の薄暗い羽田空港に始まり、モノレールは、「皆様には大変ご迷惑をお掛けしております…」と、説明のアナウンスがあるのですが、その車内は全く照明は付いておらず、暗い箱型の乗り物が淋しそうにレールを走っていました。

さて、今回のテーマは『育て！小児耳鼻咽喉科医』となっており、頭頸部がん専門医制度がスタートしたのを受けて、耳鼻咽喉科の特殊性を打ち出す意味でも、まず小児耳鼻咽喉科という分野に興味をもって欲しい、新しい治療方法の活発な討論の場として広く興味をもってもらいたいという気持ちが込められたものでありました。

小児という分野は個人的にも自分が一生関わっていききたい仕事であり、次回の本学会にもまた参加出来るよう、1年間しっかりと勤務を重ね、力をつけていこうという気持ちが奮い立つ学会であります。そして、今回も言うに漏れずそのようなものとなりました。

第35回日本頭頸部癌学会総会

宮 下 圭 一

平成23年6月9日から6月10日に、愛知県のウインクあいちの会場で開催された第35回日本頭頸部癌学会に黒野教授、大堀先生とともに参加しました。大堀先生は、「咽頭後間隙に発生した脂肪肉腫の一例」という演題で、私は「下咽頭癌に対する TPF 療法の有効性について」という演題で発表しました。前日に教育セミナーも開催され、頭頸部癌の画像診断や手術手技、新しい手術機器のデバイス等の最新の話題や情報を得ることができました。愛知県ということで、学会の帰りにトヨタ自動車の本社にも行ってみました。本社なので名古屋中心部の便利なところにあると思いきや、かなり郊外にあり、行くだけでも大変なところでした。しかしさすがはトヨタで、楽器を演奏するハイテクロボットやコンセプトカーなどのショーを堪能することができました。

第73回耳鼻咽喉科臨床学会・学術講演会

永 野 広 海

第73回耳鼻咽喉科臨床学会・学術講演会は平成23年6月24日から25日まで信州大学の主催で長野県松本市において開催されました。

当教室からは、黒野教授、私、牧瀬先生の3名で参加して参りました。黒野教授はランチョンセミナーにおいて『アレルギー性鼻炎の治療における抗ヒスタミン薬の位置づけ』を口演されました。牧瀬先生は『周術期に急速な増大を認めた鼻腔感染性肉芽腫症例』をポスター発表され、私は、『両側ステノン管狭窄症に対する唾液管内視鏡の使用経験』を口演しました。質問も無事にこなしました。また臨床の学会であるため日々の診療に役立つたくさんの症例の発表がきけて大変有意義でした。

また学会終盤牧瀬先生と北アルプス黒部立山アルペンルートまで散策にいきました。ふもとの大町は6月ですので暖かかったのですが、立山室堂は標高2400mにあるためまだ残雪を認め、濃霧のため10m先も見えない程の悪天候でした。立山連峰への登山を試みましたが、ケーブルカーの駅から50mで断念しました。山では、登る勇氣より断念する方が勇氣を必要とすると言われますが、肌で実感しました。また挑戦する機会があれば、..



立山連峰を目指す牧瀬先生

第26回九州連合地方部会学術講演会

馬 越 瑞 夫

今年は久留米，である。前乗りがなくなって少し寂しくなった。そして松根大佐のいない夏，総監督のいない夏，の開幕である。結果はいつも通り。発表は永野先生とのフロントライン。私の拙い発表に興味を持って質問していただいた他大学の若い先生方，ありがとう，がんばります。こうして私の夏休みが始まった。

第18回マクロライド新作用研究会

吉 福 孝 介

第18回マクロライド新作用研究会は平成23年7月15日～16日に北里大学白金キャンパス薬学部コンベンションホールで開催されました。今回、自分はマクロライドの臨床応用（呼吸器科、耳鼻咽喉科、皮膚科、感染症、腫瘍、その他）の群で、アレルギー性鼻副鼻腔炎に対するマクロライドと抗ヒスタミン薬の併用療法の有用性－CTによる評価－という演題で発表させていただきました。本研究会は1995年に発足以来国内、国外を問わず多くの研究者によって支えられきた研究会であるようです。マクロライドには、多くの研究者が興味を持ち、分野を超えた学術集会を行うことがメカニズムの解明が必要となってきたことから、この専門分野、診療科を超えた研究者を一同に集め、それぞれの立場から議論を進める場として本研究会は発足したとのことであります。実際に今回も、インフルエンザウイルスに対するマクロライドの効果と言ったトピックスや抗菌力を持たないマクロライドの発表等多彩なものであり非常に勉強になりました。

第41回日本耳鼻咽喉科感染症研究会・第35回日本医用エアロゾル研究会

川 島 雅 樹

第41回日本耳鼻咽喉科感染症研究会・第35回日本医用エアロゾル研究会が平成23年9月2日、3日に、東京で開催されました。当教室からは黒野教授、大堀先生と私の3人が参加致しました。私自身は、感染症を研究テーマにしていることもあり、昨年に引き続いての参加でした。台風が日本列島を北上している最中の開催でしたが、鹿児島～東京間については、交通機関の大きなトラブルもなく無事参加できました。治療に苦慮した多くの症例を拝聴でき、感染症の治療においては、病原菌・宿主の状態・感染巣の解剖・抗菌剤をよく理解して臨むことが重要であること強く認識しました。

会期中、会場より程近くの湯島聖堂を見学してみました。佐藤一斎が教鞭をとっていたことに思いを馳せると、日頃の自分の姿勢を内省し、自ずと身の引き締まる思いでした。

第24回日本口腔・咽頭科学会総会・学術講演会

永野 広海

第24回日本口腔・咽頭科学会総会・学術講演会は平成23年9月8日から9日まで広島大学の主催で広島県広島市において開催されました。

当教室からは、黒野教授、西元先生、私の3名で参加して参りました。黒野教授は『口蓋扁桃におけるホスホリルコリン特異的抗体産生とIgA腎症の予後』を口演され、シンポジウム『味覚障害診療ガイドライン作成にむけて』の司会をされました。西元先生は『味覚1』の座長されました。私は、『コレラトキシン経皮免疫による口腔粘膜免疫応答の誘導』を口演しました。

口腔領域でも特に味覚領域の受容体の研究が他施設から報告され大変勉強になりました。

午後からは隣接する呉市の大和ミュージアムの観光に行きました。呉市は戦艦大和の建造された造船の町ですが、海上自衛隊の実物の潜水艦が野外展示されている『てつのかじら館』と戦艦大和や呉の造船の歴史を紹介する『大和ミュージアム』は男子なら一度は訪れたい施設です。



てつのかじら館



大和ミュージアム自衛隊のにて

第5回九州頭頸部癌フォーラム

宮下圭一

平成23年11月5日に福岡県で開催された第5回九州頭頸部癌フォーラムに大堀先生と
いっしょに参加しました。私は「扁平上皮癌転化をきたした鼻腔内反型乳頭腫の一例」
という演題で発表しました。形成外科および耳鼻咽喉科とで合同の会であり、診断や手
術手技、治療に難渋した症例をお互いにディスカッションするため、いつもの学会では
聞けないような話を聞くことができました。また形成外科の立場からの見解などとても
参考になり、勉強になりました。

第63回日本気管食道科学会総会・学術講演会

馬越瑞夫

名古屋で開催された第63回気食に参加した。ほっち、そして2年連続の名古屋再訪で
ある。発表の初日午前に早々に終了してしまった。某セッションでやるせないほど理不
尽な突っ込みをうけて撃沈している場面を見ていたため、どうなることかと心配してい
ましたが… 帰ってきてから撃沈していたのではとの、後日、案の定鋭い指摘をされた。
ともあれいろいろと考えさせられた学会であった。夜も含めて。

第21回日本耳科学会総会・学術講演会

2011年11月24-26日

沖縄コンベンションセンター（沖縄）

宮之原 郁代

今回は、東北大学主催にて仙台で開催される予定でしたが、2011年3月11日の大震災
の影響により、沖縄での開催となりました。関係者の皆様におかれましては、大変な状
況のなかでの御準備であったとお察しいたします。まずは、本会が無事成功裡に終了し
たことをこの場を借りてお喜び申し上げたいと思います。

さて、私事ですが、久々の沖縄での学会ということもあり大変楽しみにしておいま
した。おまけに、前々週から風邪に罹患しかなり調子をくずしていたので、沖縄に到着し
たときのほわっとした風の暖かさには、何とも癒されました。11月末ではありましたが、
過ごしやすい気候で（少々風はつよいものの）、沖縄滞在中にすっかり療養して鹿児島

に帰ることができました。

学会プログラムは、充実しており、国際的に活躍されている福島孝徳先生の「聴神経腫瘍1560例の総括」と題した臨床経験に基づく貴重な講演や、ランチョンセミナーの佐藤圭創先生の「病態を考えた未来の感染症治療をめざして」では、マクロライドによるインフルエンザウイルス感染症治療の可能性、など興味深い講演を聴くことができました。また、公募シンポジウム「耳科疾患の患者となってわかったこと」では、実際に耳科疾患の患者になった4人の先生方が、自らの経験を提示されました。その病気を知っているということと、その病気を体験することは全く異次元のことであり、これらの先生方の貴重な体験をお聞きすることができ、大変有益でありました。自分が、その立場になって（はじめて）はっと気付くことがあるのだらうと思います。また、病気あるいはその治療が、患者さんのものの考え方や人生にも大きく影響していくことを、あらためて心しておくべきであると感じました。

今回PDFで配信されていたプログラム、抄録すべて、iPhoneで持参してみました。（ピンチアウトすれば、抄録も読めました！）非力な私は、いつも抄録集が重く、四苦八苦していたのですが、今回身軽に学会参加でき大変よかったです。

第50回日本鼻科学会総会・学術講演会

大 堀 純一郎

第50回日本鼻科学会総会・学術講演会は、平成23年12月1日から3日まで岡山の岡山コンベンションセンターで開催された。鼻科学会前日に、鼻科学基礎問題研究会、鼻科学臨床問題懇話会が開催され、今回私は、鼻科学基礎問題研究会で発表させていただいた。テーマは「慢性鼻・副鼻腔炎の難治化因子とその制御」であった。近年の鼻科学のトピックである好酸球性副鼻腔炎について4人の演者がそれぞれの立場から報告を行った。私のほかには、自治医科大の瀬嶋先生、順天堂大の本間先生、岡山大の桧垣先生が発表を行った。その後の鼻科学臨床問題懇話会でも、好酸球性副鼻腔炎の話題であり、好酸球性副鼻腔炎の診断基準について活発に議論が交わされた。現時点で、好酸球性副鼻腔炎の診断基準について確定したものはないが、ある程度のコンセンサスが得られるようになってきて、診断基準が確定するのも時間の問題であろうと思われた。

第22回日本頭頸部外科学会総会

吉 福 孝 介

第22回日本頭頸部外科学会は平成24年1月26日～27日に福島県で開催されました。今回の学会のメインテーマは「感動を与える外科」であり、機能回復手術により聞こえるようになった、声が出るようになったなど患者さんに感動を与えると同時に、顕微鏡や内視鏡による精密な手術、外切開によるダイナミックな手術を見て感動を与えられればという主旨で開催されました。実際ビデオ演題も多く、アドバンスト手術手技セミナーでは、高度な手術手技やトラブルシューティングを見せて頂き感銘いたしました。

ところで、今回福島で開催されたわけですが、本学会を平常通り開催することが復興への大きな一歩になると考えているとの第22回日本頭頸部外科学会会長 大森孝一教授のお言葉がございました。東日本大震災があったにもかかわらず福島の皆さんはふつうに日常生活を送っており、また、本学会でしっかりと勉強させていただき非常に有意義な学会でありました。福島県立医科大学医学部耳鼻咽喉科教室の皆さん、本当にありがとうございました。

第30回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会

早 水 佳 子

本学会は、自治医科大学耳鼻咽喉科学講座・清水猛史会長のもと、平成24年2月16日～18日の3日間、琵琶湖ホテルで開催されました。当教室からは、黒野教授・大堀先生・永野先生・私の4人で参加させて頂きました。

御承知のごとく、本学会の理事長でもある黒野教授は改めて凄い方なのだなど、驚く事件がありました。それは、学会懇親会后、私達も偶々運が良く、V.I.P.だけの2次会に黒野教授の恩恵で連れて行って頂いた時のことです。(勿論、しもじもの私達は、メインの方達とは別のテーブルでした。ちなみにそこで、出てきた今までに見たこともないポテトチップスやチョコレートにも私はかなり驚いたのですが…)

黒野教授が、「明日の学会のこともあるし、早々に休もうかな。」と、席を立った瞬間でした。そこにいる皆が一斉にワーッと立ち上がるのです。そして、「黒野先生、本当に有難うございました。」「良い学会になりましたね。有難うございます。」「本当に勉強になりました。黒野先生のお話は興味深いです。」と、次々に握手を求めながら感謝の挨拶が始まったのです。自分は、(こんな美味しいのがあるんだ、今まで飲んだのは何だったんだ?!)と、3杯目のジンジャーエールが入ったグラスを手にして、その光景



ホテルからの雪景色。今回、大寒波となり一晩で銀世界へ。自分にとっては、今季の初雪となりました。

を眺めていました。私と同様に座りっぱなしで、ぼかーんと見ていたのは、他2名。大堀先生と永野先生のみです。天皇陛下？ヒットラー？が帰るならば、こうなるだろうと思った次第でした。

それはさておき、今学会は、「臨床での疑問を基礎研究につなげて研究成果を、また診療に還元する視点」を忘れない研究、原点を見つめなおすことがテーマでありました。「アレルギーはなぜアレルギーになるのか?」、「癌細胞による巧妙な免疫回避機構」、「気道粘膜における Th2免疫の機序と上皮の役割」といった魅力的なレクチャーが開催されました。

何故？ どうして？ と自分の考えを如実に反映させながら実験する能力などまだまだ私には無理なのですが、清水会長が、「自分も若い頃まずはがむしゃらに取り組み、経験を積み重ねて今に至ります。」と教えてくれた言葉が印象的な、実りある学会となりました。

第24回日本喉頭科学会・学術講演会

牧 瀬 高 穂

3月8日から2日間、石川県金沢市で行われた第24回日本喉頭科学会・学術講演会に参加させていただきました。喉頭疾患について幅広く勉強するには最適の学会で、昨年に引き続き参加しました。今回は、「喉頭の粘膜病変を伴った水疱性類天疱瘡症例」のタイトルで発表しました。たくさんの意見をいただくことができ、大変有意義な発表となりました。本学会には永野先生と参加しましたが、昨年開業した九州新幹線と3月で廃止となる寝台特急日本海を乗り継いで金沢まで行きました。初めての寝台特急は随所に古き良き日本の姿が残っていて、大変感動いたしました。時代の流れとはいえ、廃止となるのは大変残念な気がしました。世の中、便利になっているのかそうでないのか、寝ながら考えた寝台特急の旅でした。

第24回気道病態研究会

大 堀 純一郎

本研究会は、平成24年3月3日に東京で開催された。当科からは、私と黒野教授が参加した。大山名誉教授も参加されていた。本研究会は、基礎の先生方から耳鼻咽喉科、呼吸器の臨床の先生まで幅広い先生方の発表があり、自分の分野外の先生方からの質問や討論などは、あらたな目線を発見する良い機会であった。特別講演では、大阪大学の吉森 保先生のオートファジーに関する話を聞くことができた。飢餓状態の細胞が、自分のタンパクを栄養源としてエネルギーを得るシステムが、細胞内への病原体の侵入に関しても防御機構として働くことを詳しく講演していただいた。オートファジーの様子を電子線トモグラフィーによって視覚化しているところなどは、細胞内の様子が手に取るようにわかった。測定機器の進歩により、これまで目に見えなかったものが、視覚化できるようになり、これからもどんどん生命科学は解明され進歩していくのだろうと感じた。

4. 国際学会発表

10th International SYMPOSIUM Recent Advances in Otitis Media

早水佳子

本学会は、ピッツバーグ医科大学の耳鼻咽喉科学講座、ピッツバーグ小児病院の小児耳鼻咽喉科学講座のもと平成23年6月5日～9日の5日間、ルイジアナ州ニューオーリンズのマリオットホテルにて開催されました。当教室からは、黒野教授・川島先生・私の3人で参加しました。

おりしも、東日本大震災の後であり、飛行機の確保が往路・復路を同じにすることが出来ませんでした。関西空港→サンフランシスコ→ニューオーリンズ→ロサンゼルス→羽田新国際空港、と大移動となりました。なのではぐれても、数日後に同じ空港に戻ってくるから大丈夫…という訳にはいきません。くれぐれも迷わないように、離れないようにとの教授からのお達しで国際学会への旅は始まりました。サンフランシスコに着いて、早速入国審査です。審査官から、「何の為にうちに来たんだ？」との質問があります。周りで、同じように日本からポスターを抱えた方が、正直に「meeting」だの「conference」だのと答えて、押し問答しているのを見て、自分はすかさず「sightseeing」と答えたのでした。一瞥のみで颯爽と終わり、帰りもこの手で行こうと思ったのでした。



ニューオーリンズは比較的治安が悪い街とのことで、単独行動は行わず（行えず？）、学会が落ち着いた夜になると仲良く3人連れ立ってジャズストリートやかつてフランス領とされていたフレンチ・クォーターに出かけては、ビールを飲み、カキを食べ、肉を喰らい、そしてまたビールを飲むといった日々を重ねました。

ローレンさんという、本学会の副理事長が、どの会場にも前席を陣取って、眼鏡の奥のキラリとした鋭い眼光に見詰められ、これまた演者に鋭い質問をするのには、蛇に睨まれた何とやら…状態でもとてもコワくて印象的でした。（笑）

本学会で知ったことは、学術的なこともあります。留学経験のある人は、まあ本当に良く食べるものだ。（消化器がきつと強いのだな。）ということと、川島先生の小荷物ぶりです。日頃から、自分もかなり荷物は少ない方で自信をもっていたのですが、今回は大差で負けました。

XIV IRS 14th International Rhinologic Society XXX ISIAN 30th International Symposium on Infection and Allergy of the Nose

Tokyo, Japan Sep.20-23, 2011

牧 瀬 高 穂

9月20日から4日間、東京で開催されたXIV IRS 14th International Rhinologic Society, XXX ISIAN 30th International Symposium on Infection and Allergy of the Noseに参加させていただきました。当初は4月に開催予定でしたが、東日本大震災の影響で開催延期となっていました。吉福先生とポスター発表で参加しました。学会には国内外の高名な先生が多数参加されていて、シンポジウムやセミナーを聞いているだけで、新しい知見や考え方を知ることができ大変有意義でした。学会中に台風が東京を直撃して交通機関がマヒするといったアクシデントもありましたが、無事に終えることができました。今回も自身の英語力不足を痛感する学会となり、英語力を身に着けるよう努力しなければと思いつつながら鹿児島に帰りました。

11th Japan-Taiwan Conference on Otolaryngology-Head and Neck Surgery

川 島 雅 樹

11th Japan-Taiwan Conference on Otolaryngology-Head and Neck Surgery が平成23年12月8日、9日に神戸市で開催されました。当教室からは、黒野教授、牧瀬先生と私の3人が参加致しました。全国の著名な先生方のご講演を一度に拝聴できる貴重な時間を過ごすことができるとともに、耳鼻咽喉科診療に関しての日本と台湾における考え方の相違を知る機会ともなりました。以前、韓国を訪れた際にも同様のことを感じたのですが、台湾の先生方の英会話の堪能さとバイタリティーに深く感心しました。

5. 関連病院便り

国立病院機構鹿児島医療センターだより

西 元 謙 吾

早いもので鹿児島医療センターが松崎・西元体制になり4年が経過しようとしています。本年度は未曾有の東日本大震災の影が濃く残っている時期からのスタートでしたが、やはり九州は遠いのか診療への影響は少なかったと思います。当院からは内科の先生が東北に向かいましたが、我々耳鼻咽喉科には声はかかりませんでした。義援金を送るのが精一杯でしたが、何かと考えさせる1年だったと思います。

今年度から外来を予約制に変更し、外来診療の効率化ははかれたように思います。しかし、外来の負担が軽減されてはいる一方、入院についてはあまり変化がなく、手術症例については昨年よりやや減少しているにもかかわらず内容的にはむしろ大変なことも多くなったと思います。最近、最も懸念されていることは、4年前と比べこの体制が変わっていないということは、それぞれ4歳ずつ高齢化しているわけで、私達の体力的な問題が出てきていることです。2人体制にしては多めの症例を診療していますが、4年前にはあまり気にならなかった業務も最近は年齢的な疲れ？からかきつく感じるようになってきました。それ以上にリスクマネジメント的に問題がでてくるのが懸念され、実際にヒアリハットになることが出てきています。さらに来年度は電子カルテも走り出しますので、色々な変化があり、かなり大変な年になりそうです。毎年の事ですが、スタッフの増員が待ち望まれます。

我々の高齢化も問題ですが、患者の高齢化や合併症の割合もかなり上がってきている印象です。最近の傾向である手術を避け放射線化学療法を希望される患者が増える流れは今年度も変わりありませんでしたが、その分放射線化学療法でコントロールできそこなった患者のサルベージや状態が悪くて放射線化学療法に持っていけない方の手術治療も多くなってきています。再建手術は一昨年をピークにやや減少してきています。

今年度も耳鼻咽喉科を選んでいただいた研修医が3人いて楽しく仕事ことができました。耳鼻咽喉科のいいところをアピールできているかちょっと不安なところもありますが、少なくとも我々の一所懸命に働いている姿はみせることはできているのでしょうか。働く環境も、毎年我々が要望していたコンクリートむき出しになっていた病棟の中庭にガーデニングを設置してもらい、患者さん達も私達スタッフもホッと心が和んでいます。来年度は心にちょっとした余裕を持って診療にあたりたいものです。

手術件数（手術記録にあるもの）

良性疾患

口蓋扁桃摘出術（アデノイド切除術同時手術も含む）	: 117例
咽頭形成術・茎状突起過長症手術	: 4例
内視鏡下副鼻腔手術（乳頭腫, devi + subcon 同時手術も含む）	: 120例
鼻中隔矯正術・粘膜下鼻甲介骨切除術単独	: 18例
その他の鼻副鼻腔手術	: 7例
鼓室形成術	: 8例
鼓膜形成術	: 8例
チューブ留置・アデノイド・先天性耳瘻孔など	: 13例
顔面神経管開放術・内耳窓閉鎖術	: 3例
耳下腺腫瘍切除術	: 26例（うち両側2例）
顎下腺摘出術	: 15例
舌下腺摘出術	: 4例
甲状腺腫瘍摘出術	: 11例
頸部腫瘍・嚢胞摘出術	: 15例
副咽頭間隙腫瘍	: 1例
深頸部膿瘍	: 2例
口腔腫瘍摘出術など	: 9例
喉頭直達鏡手術・食道直達鏡手術	: 85例
その他（気管切開・リンパ節摘出術・皮弁形成術など）	: 43例
良性疾患合計	509例

悪性疾患

頭頸部悪性腫瘍手術（遊離皮弁による再建あり）	: 13例
頭頸部悪性腫瘍手術（遊離皮弁による再建なし）	: 26例
頸部郭清術単独	: 11例
甲状腺悪性腫瘍手術	: 16例
耳下腺悪性腫瘍手術	: 5例
顎下腺悪性腫瘍手術	: 1例
悪性疾患合計	72例

総症例数 581例

鹿児島市立病院便り 2012

高 木 実

皆様、いつもお世話になっております。鹿児島市立病院耳鼻いんこう科の高木です。今回でこの鹿児島市立病院便りも4回になってしまいました。

平成23年度、当院は、ドクターヘリの導入等色々な事がありました。特に年明けにはインフルエンザが患者だけではなく、看護師・医師等のスタッフ間でも感染があり、緊急入院等の制限等もあり大変な状態で皆様に大変迷惑をかけたことと思います。紹介されて来た方にも状況を説明し、他院へ受診していただくこともしばしばでした。何卒緊急入院等が必要な方の紹介時には、対応可能な返答やベッドの確保等できますので、一報していただければと思います。今回は短編となりましたが、今後とも宜しく願います。

藤元早鈴病院便り

森 園 健 介

皆様いかがお過ごしでしょうか。藤元早鈴病院に勤務させていただいております森園です。

今回の病院便りを書くにあたり昨年のもを見直してみましたが、東北での震災及び原発事故についてほとんど記載していなかったことに我ながら驚き、またこの1年間は震災や原発に関しての話題がいかに多かったかということに改めて気付かされました。東北から遠く離れた地で生活しているとどうしても対岸の火事のように感じてしまうところがあるのですが、川内原発を抱える鹿児島県も決して他人事ではないわけで、日々の報道を見るにつけ僕のような愚鈍な人間でさえも深く考えさせられる毎日を送っています。

さて最近の藤元早鈴病院についてですが、H24年度中の病院機能評価認定に向けて様々な部門で取り組みを行なっているところです。身近なところでは4月1日から敷地内全面禁煙となったため、愛煙家の方々は困っておられるようです。(なぜか敷地内のコンビニではまだタバコを販売していますが…)自分においては認定基準の一つである期限内の退院サマリの記載が十分に出来ていないため、今年の努力目標としたいと考えています。

また今年は開院70周年に当たるとのことで、5月26日に都城市総合文化ホールにて大

規模な公開市民講座を開く予定となっております。各科で講演を行うことになっており、その準備が最近の悩みの種となっております。

耳鼻科としましては4月から外来看護師が変更となりました。今回は診療科増設に伴う異動なのですが、実際のところ外来の看護師が一通り仕事を覚えた頃に異動となるのがこのところ度々あり、非常に難渋しております。改善の要請は出しているのですが、病院の事情、スタッフそれぞれの事情もあって難しいところもあるようです。

また手術に関して、鼻手術用のマイクロデブリッターを昨年購入させていただきました。十分に使いこなせているかは疑問が残るところですが、ESSやアデノイド切除などに活用していきたいと考えております。また扁桃などの手術で使用していた光源装置が先日ついに壊れてしまったのですが、よくよく製造年月日を見てみると自分の生まれる前から使用されていたようです。現在使用している機材は脳神経外科のお下りの光源とヘッドライトなのですが、引き続き使えるものは大事に使って行きたいと思います。日々の業務においては引き続き大学病院の先生方や、近隣の先生方に御迷惑をおかけすることが多々あるかと思いますが、今後ともどうか宜しくお願いいたします。

鹿児島生協病院便り

積山幸祐

2005年4月1日に生協病院に赴任して早くも7年が経過しました。赴任前は幼稚園生であった長男も中学2年生になり、時の流れの速さを実感しています。それまでは数カ月から数年で勤務先が変わっていたので感じませんでしたが、幼少時に手術をした患者さんの成長した姿を見るのは、うれしいものです。このような小さな喜びを糧に、これからも自分にできる仕事を確実に安全にこなしていきたいと思います。生協病院耳鼻咽喉科では、2010年7月から手術枠を週一単位増やし、火曜日を終日手術日とした為、比較的長い手術も施行しやすくなり、数もこなせるようになりました。2011年1月から12月までに手術室で施行した手術症例は174例で昨年の143例より増加しました(表)。手術はほとんど待機期間なく施行できます。どしどしご紹介ください。

2011年 手術症例	人
扁桃摘出術	70
軟口蓋形成術	1
アデノイド切除術	2
鼓室形成術	4

鼓膜形成術	15
鼓膜チューブ留置術	3
内視鏡下鼻内副鼻腔手術	26
術後性上顎嚢胞摘出術	2
鼻中隔矯正術 + 下鼻甲介（骨）切除術	9
鼻副鼻腔腫瘍生検	1
頬骨骨折整復術	1
耳下腺腫瘍手術	6
顎下腺摘出術	1
舌腫瘍摘出術	1
喉頭蓋嚢胞摘出術	2
喉頭腫瘍摘出術	2
声帯ポリープ摘出術	9
頸部腫瘍摘出術	1
気管切開術	1
がま腫摘出術	3
術後出血止血術	1
中咽頭腫瘍摘出術	1
唾石摘出術（口内法）	3
甲状腺癌切除術	1
口唇粘液嚢胞摘出術	1
先天性耳瘻孔摘出術	3
頸部リンパ節生検	3
皮下腫瘍摘出術	1
計	174

天辰病院便り

谷本 洋一郎

毎年このさくらじま原稿を書く季節はインフルエンザが猛威を振るっている時期であり、これまでは一度もインフルエンザにかかったことのなかった自分もついに昨年人生初のインフルエンザを経験しました。休日当番医の前日のことであり、大学病院から応援をいただいたり、いろんな方々に迷惑をかけてしまいました。開業医の先生をはじめ一人体制でされている病院はなかなか代わりがないので、感染予防にはかなり気を使われていることと思います。当院でも外来患者様もですが、手術予定の患者様もいらっしゃるので、インフルエンザにかかったからじゃあ誰か代わりにお願いしますとはなかなかいかず、何とか今年は感染しないように、いつも以上に気をつけているところです。話が本題からずれてしまいましたが、私も早いもので天辰病院に赴任してから約4年が過ぎようとしています。外来患者様も増えてはきていますが、当院の看板が小さいせいもあるのか、こんなところに耳鼻科があったんですね、といまだに時々言われます。地域の患者さんに認知していただくのはまだまだといったところです。手術も下記のように年々増えてきてはいますが、症例数としてはまだまだです。昨年 ESS のセットも購入していただき、これからますますがんばって症例もこなしていかないといけないと思っています。今後とも入院、手術症例等御紹介よろしく願いいたします。

手術症例 2011年度

扁桃摘：19例

ESS（鼻中隔矯正術同時手術，POMC）含む：11例

鼻中隔矯正術：1例

咽頭形成術：2例

外耳道腫瘍摘出術：1例

気管孔閉鎖術：1例

鼓膜穿孔閉鎖術：2例 計37例

XIII. 関連病院

(平成24年4月現在)

病 院 名	郵便番号	住所 (TEL・FAX)	外来診療曜日	手術曜日
国立病院機構 鹿児島医療センター	892-0853	鹿児島市城山町8-1 TEL:099-223-1151 FAX:099-226-9246	月・水・金 (8:30~11:00)	月・火・水 木・金
国立療養所星塚敬愛園	893-0041	鹿屋市星塚町4204 TEL:0994-49-2500 FAX:0994-49-2542	月・水 (8:30~17:00)	
鹿児島市立病院	892-8580	鹿児島市加治屋町20-17 TEL:099-224-2101 FAX:099-223-3190	新患 月・水・金 再診 火・木 (8:30~11:00)	月・水・金
鹿児島生協病院	891-0141	鹿児島市谷山中央 5丁目20-20 TEL:099-267-1455 FAX:099-260-4783	月・火・木・金 (8:30~17:30) 水・土 (8:30~12:30) (新患は30分前まで)	火・水・木 の午前
今村病院分院	890-0064	鹿児島市鴨池新町11-23 TEL:099-251-2221 FAX:099-250-6181	火・土 (8:30~11:30)	
藤元早鈴病院	885-0055	都城市早鈴町17-1 TEL:0986-25-1212 FAX:0986-25-8941	月・水・木・金 (9:00~17:00) 火 (9:00~11:00)	火の午後

病 院 名	郵便番号	住所 (TEL・FAX)	外来診療曜日	手術曜日
あまたつクリニック	891-0175	鹿児島市桜ヶ丘4-1-6 TEL:099-264-5553 FAX:099-264-1771	月・火・木・金 (9:00~17:30) 土 (9:00~12:30)	土の午後
垂水中央病院	891-2124	垂水市錦江町1-140 TEL:0994-32-5211 FAX:0994-32-5722	金 (9:00~17:00)	
加治木温泉病院	899-5241	始良郡加治木町木田字 松原添4714 TEL:0995-62-0001 FAX:0995-62-3778	木 (10:00~16:30)	
田上病院	891-3198	西之表市西之表7463 TEL:09972-2-0960 FAX:09972-2-1313	火 (9:00~17:30) 水 夏(14:00~17:00) 冬(14:00~16:20)	
阿久根市民病院	899-1611	阿久根市赤瀬川4513 TEL:0996-73-1331 FAX:0996-73-3708	火・金 (8:30~15:30)	
栗生診療所	891-4409	熊毛郡屋久島町栗生1743 TEL:09974-8-2103 FAX:09974-8-2751	隔週木曜日 (8:00~15:30)	

病 院 名	郵便番号	住所 (TEL・FAX)	外来診療曜日	手術曜日
豊永耳鼻咽喉科医院	868-0037	人吉市南泉田町120 TEL:0996-22-2031	第2, 4土曜日 (9:00~15:00)	
鹿児島厚生連病院	890-0061	鹿児島市天保山町22-25 TEL:099-252-2228 FAX:099-252-2736	火・金 (8:30~17:00)	
公立種子島病院	891-3701	熊毛郡南種子町 中之上1700-22 TEL:0997-26-1230	隔週木曜日 (8:30~16:00)	

氏 名	在 局 期 間	連 絡 先
1 李 廷権 (韓国, 延世大学)	昭和60年7月1日 ～61年12月25日 平成元年6月26日 ～8月25日	Department of Otolaryngology Severance Hospital College of Medicine Yonsei University C.P.O. BOX 8044, Seoul, 100-680 KOREA TEL 82-2-2228-3605
2 Richard T. Jackson (アメリカ, Emorty 大学)	昭和60年9月6日 ～12月5日	Emory University School of Medicine Center Laboratory of Otolaryngology 441 Woodruff Memorial Building Atolanta, Georgia 30322 U.S.A.
3 関 陽基 (韓国, ソウル大学)	昭和61年1月22日 ～2月21日	Department of Otolaryngology Colledge of Medicine Seoul National University 28 Yoongun-Dong, Chongro - Koo Seoul 110, KOREA
4 Sumet Peeravud (タイ, ソンクラ大学)	昭和62年5月7日 ～7月11日	Department of Otolaryngology Faculty of Mediciene, Prince of Songkla University Haadyai, Songkka Thailand
5 Khemchart Tonsakurungruang (タイ, チョラロンコン大学)	昭和62年6月25日 ～63年6月14日	Department of Otolaryngology Faculty of Medicine Chulalongkorn University Bangkok 10500, Thailand
6 金 濟霖 (中国, 中国医科大学)	昭和62年8月1日 ～10月29日	中華人民共和国 沈阳市和平区南京街五段三号 中国医科大学附属第一医院 耳鼻咽喉科学教室
7 Phanuvich Pumhirum (タイ, タイ軍医科大学)	昭和63年3月9日 ～3月31日	Department of Otolaryngology Phra Mongkutkiao Hospital Bangkok 10400, Thailand
8 Phakdee Sannikorn (タイ, ラジブチ病院)	昭和63年4月5日 ～平成元年6月5日	Department of Otolaryngology Rajvithi Hospital Rajvithi Road, Phyathai, Bangkok 10400 THAILAND TEL 2460052 EXT 520

氏 名	在 局 期 間	連 絡 先
9 Acharee Sorasuchart (タイ, チェンマイ大学)	昭和63年4月24日 ～5月15日	Department of Otolaryngology, Faculty of Medicine, Chiang Mai University Chiang Mai 50002, THAILAND
10 Cheerasook Chongkolwatana (タイ, マヒドール大学)	昭和63年5月9日 ～9月30日	Department of Otolaryngology Faculty of Medicine Siriraj Hospital Mahidol University Bangkok 7, THAILAND
11 Chul-Hee Lee (韓国, ソウル大学)	昭和63年7月14日 ～8月14日	Department of Otolaryngology College of Medicine, Seoul National University 28 Yeonkun-dong, Chongro-ku, Seoul, 110 KOREA
12 金 春順 (中国, 白求恩医科大学)	平成元年3月6日 ～4月5日 平成2年4月1日 ～9月30日(11月14日) 平成4年10月26日 ～11月3日	中国吉林省長春市南岭小街吉林工大新村18棟5号
13 Surat Mongkolaripong (タイ, ラジブチ病院)	平成元年3月10日 ～10月31日	Department of Otolaryngology Rajvithi Hospital Rajvithi Road, Phyathai, Bangkok 10400 THAILAND TEL 2460052 EXT 520
14 Pierre-Marie Benezeth (フランス, グルノーブル大学)	平成元年9月8日 ～10月17日 平成3年4月7日 ～4月9日	7 Place De La Republique 26000 Valence France TEL 75-43-11-86 FAX 75-55-41-10
15 Preedee Ngaoteprutaram (タイ, マヒドール大学)	平成元年9月14日 ～2年9月13日	Department of Otolaryngology Prapokkiao Hospital Amphoe Muang, Chanthaburi 22000, THAILAND
16 Myung-Whun Sung (韓国, ソウル大学)	平成2年1月20日 ～3月19日	Department of Otolaryngology College of Medicine, Seoul National University 28 Yeonkun-dong, Chongro-ku, Seoul, 110 KOREA
17 鄭 勝圭 (韓国, 延世大学)	平成2年3月9日 ～3年4月27日	Department of Otolaryngology Samsung Medical Center 50 Ilwon-dong, Kangnam-ku Seoul, 135-230 KOREA 135-230

氏 名	在 局 期 間	連 絡 先
18 Markus Rautiainen (フィンランド, クオピオ大学)	平成 2 年 12 月 7 日 ～ 3 年 12 月 21 日 平成 5 年 10 月 12 日 ～ 10 月 17 日	Department of Clinical Sciences (ENT) Tampere University, PL607 SF-33101 Tampere Finland
19 Dacha Noonpradej (タイ, ハジャイ病院)	平成 3 年 4 月 10 日 ～ 9 月 7 日	Department of Otolaryngology Haadyai Hospital Haadyai, Songkhla, 90110 Thailand TEL 074-230800-4
20 Chehlah Muhmaddaoh (インドネシア, YARSI 医科 大学)	平成 4 年 5 月 17 日 ～ 5 年 5 月 16 日	113/18 Siroros Road T. Seteng A. Muang C. Yala (95000) Thailand FAX 66-073-221665
21 方 深毅 (台湾, 台湾大学)	平成 4 年 7 月 1 日 ～ 9 月 26 日	Department of Otolaryngology National Cheng Kung University Hospital 138, Sheng hi Road, Tainan 70428 Taiwan, R.O.C. TEL 06-2353535 EXT 2309
22 Ic-Tae Kim (韓国, ソウル大学)	平成 5 年 8 月 3 日 ～ 9 月 28 日	Department of Oto ; laryngology College of Medicine, Seoul National Universi ty 28 Yeonkun-dong, Chongro-ku, Seoul, 110 KOREA
23 Joon-Heon Yoon (韓国, 延世大学)	平成 5 年 6 月 5 日 ～ 6 月 8 日 平成 6 年 1 月 18 日 ～ 3 月 1 日	Department of Otolaryngology Severance Hospital College of Medicine Yonsei University C.P.O. BOX 8044, Seoul, 100-680 KOREA TEL 82-2-361-5780
24 Prasit Mhakit (タイ, Pramongkutklao 大 学)	平成 6 年 3 月 11 日 ～ 6 月 4 日	Department of Otolaryngology Pramongkutklao College of Medicine, Thailand TEL 662-246-0066 EXT 3076, 3100
25 呂 宏光 (中国, 大連医科大学)	平成 6 年 4 月 2 日 ～ 4 月 19 日	中華人民共和国 大連市中山路222號 大連医科大学附属第一病院 耳鼻咽喉科学教室 〒 116011 TEL 3635963-3088
26 王 振 海	平成 5 年 1 月 25 日 ～ 平成 9 年 3 月 31 日	中国医科大学附属第二病院 耳鼻咽喉科

氏 名	在 局 期 間	連 絡 先
27 Jussi Laranne (フィンランド, タンペレ市)	平成6年4月4日 ～7年6月13日	SUKKAUAR TAAN KATU 6A8 33100 TAMPERE Finland
28 Sidagis Jorge	平成6年10月3日 ～11年3月31日	Comp. Hab. Malvin Norte, Calle 122, N° 2152/301, Block 7, Montevideo, CP11400 U URUGUAY (South America)
29 馬 秀 嵐 (中国, 中国医科大学)	平成8年1月25日 ～8年12月30日	中国瀋陽市和平区南京北155号 中国医科大学第一臨床学院耳鼻咽喉科 〒110001
30 歐 俊 巖	平成13年3月23日～H13. 9	Department of Otolaryngology National Cheng Kung University Hospital 138, Seng Li Rd., Tainan Taiwan TEL +886-6-2353535 FAX +886-6-2377404
31 孫 東	平成13年4月2日～H17. 3	114003 中国遼寧省鞍山市鉄来区対炉山新呉衛21-7号
32 王 旭 平	平成20年11月1日 ～H21年2月13日	〒210002 中国江苏省南京市白下区楊公井34棟34号 南京市楊公井病院 耳鼻咽喉科 電話番号: 86-25-80864050 (office) 86-25-84542942 (home)

氏 名	最終職別	在 局 期 間
西 宜 行	研 修 生	59. 4-59. 6
河 野 正 樹	研 修 生	60. 4-60. 6 61. 1-61. 3
山 内 慎 介	研 修 生	62. 4-62. 6
四 元 俊 彦	研 修 生	63. 4-63. 6
畑 幸 宏	研 修 生	63.10-63.12
三 角 芳 文	研 修 生	63.10-63.12
吉 満 伸 幸	研 修 生	H2. 7-H2. 9
斧 淵 泰 裕	研 修 生	H2.10-H2.12
宮 原 広 典	研 修 生	H3. 1-H3. 3
黒 木 茂	研 修 生	H5. 7-H5. 9
神 野 公 宏	研 修 生	H5.10-H5.12
藤 郷 秀 樹	研 修 生	H5.10-H5.12
的 場 康 平	研 修 生	H7. 1-H7. 3
伊瀬知 敦	研 修 生	H7.10-H7.12
泊 口 哲 也	研 修 生	H8. 1-H8. 3
島 名 昭 彦	研 修 生	H8. 7-H8. 9
福 田 弘 志	研 修 生	H8.10-H8.12 H9. 4-H9. 6
安 藤 五三生	研 修 生	H9. 1-H9. 3
吉 元 英 之	研 修 生	H10.4-H10.6
肘 黒 公 博	研 修 生	H11.1-H11.3
横 山 孝 二	研 修 生	H11.4-H11.6

氏 名	最終職別	在 局 期 間
田 中 裕 之	研 修 生	H11.7-H11. 9
永 野 広 海	研 修 生	H13.6-H13.12
森 田 義 紀	研 修 生	H15.1-H15. 3

鹿児島大学大学院耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室 同 門 会 会 則

(総則)

第1条 本会は鹿児島大学大学院耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室同門会と称する。

第2条 本会は鹿児島大学大学院耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室（以下教室と略す）に事務所をおく。

(目的ならびに事業)

第3条 本会の目的は会員相互の親睦を図り、学術研究ならびに社会的発展に資するにある。

第4条 本会は前条の目的を達成するため次の事業を行う。

1. 同門会総会の開催
2. 同門会誌ならびに会員名簿の発行
3. 記念事業の開催
4. その他本会の目的を達成するために必要な事業

(会則)

第5条 本会は会員を次のとおりとする。

教室に在籍又はこれと同等と認められる者。本会の趣旨に賛同し入会を希望して承認された者。

第6条 本会の運営は会費及び寄付金をもって行う。会費は年会費（開業医10,000円、勤務医4,000円）を納めるものとする。特別会員、顧問は会費を免除する。（但し70歳以上）

第7条 会費を滞納した会員は本会より連絡を受けられないことがある。

第8条 会員は希望により退会することができる。

第9条 会員であって本会ならびに教室の名誉を著しく傷つけた場合には役員会の決議を経て会長がこの者を除名することができる。

(役員)

第10条 本会には次の役員をおく。会長1名、副会長、理事、監事、幹事それぞれ若干名。

なお本会に名誉会長ならびに顧問をおくことができる。役員任期は3年とする。

第11条 会長は教室主任教授又は同門会会員から選び、会務を統轄する。

第12条 役員改選時、(旧)役員会は(新)会長候補を決定し、総会での承認を経て

新会長が選出される

- 第13条 副会長は会員の中から会長がこれを委嘱し、会長を補佐する。
- 第14条 理事は会員の中から会長がこれを委嘱し、会務を審議する。
- 第15条 監事は役員会においてこれを選出し、会長がこれを委嘱する。
監事は会計を監査する。
- 第16条 幹事は会員の中から会長がこれを委嘱し、会務処理に当たるものとする。
- 第17条 名誉会長ならびに顧問は会員の総意に基づき推挙されるものとする。
(会議)
- 第18条 総会は年1回開催する。必要があれば会長は臨時総会を招集し得る。
総会における決議は出席会員の過半数をもってする。
- 第19条 役員会は会長が招集し、事業計画、経理その他重要な事項を審議する。
(会則の変更)
- 第20条 本会の会則は総会の承認を得て、変更することができる。
(本会則は平成22年1月17日より施行する。)

●●●●●●●●●● 編 集 後 記 ●●●●●●●●●●

最近の桜島の降灰には参る。鹿児島地方気象台の噴火回数によると2008年まで年間100回以下だった噴火が、2009年から急増し、2010年に1026回、2011年に1355回と毎年新記録を更新している。今年は5月末で673回である。

しばらく降灰袋（鹿児島では灰が降ると家の周りを掃除し、この袋に入れて回収場所に置いておくと市が灰を回収してくれる）を見ることが無かったが、最近道端に積んである降灰袋をみると克灰袋と書いてある。いつの間に表記が変わったのだろうか。灰を克服するためという意味が込められているらしく、2009年に配布されているものはすでに克灰袋になっているようである。

3.11の地震のあと自宅に太陽光発電を付けた。原発事故をうけて自然エネルギーへ転換などという大義ではなく、補助金も受けられるし、売電で光熱費0、最近ひどい灰もないし預金よりは利益が上がるかもと欲をかって設置した・・・とたんにこのドカ灰である。太陽光発電パネルの灰を流すための水道代の方が高くつくのではと不安に駆られたが、屋根の傾斜のためか特に洗い流さなくとも自然の雨で流れおち、発電パネルにはあまり灰がこびりつかないみたいで、最近の降灰のあと特に発電量がおちている様子はない。一安心である。しかし、このドカ灰がこの夏続くと思うと今後の発電が気になる。7月には京セラを中心に国内最大のメガソーラーが桜島の対岸の埋立地に着工するようだが、降灰に対し灰を克服する対策をどのようにとってくるのか興味があるところである。

YouTubeで桜島の降灰を検索すると噴火の様子がたくさんアップされている。噴火の様子や、降灰中のドライブ動画、灰雨の降ってくる様子などを見ると、鹿児島に住んでおきながら、よくもまあこんな活火山のふもとに人口50万を超える都市ができたものだと感心してしまう。ある意味すでに灰を克服しているといえるかもしれない。鹿児島といえば桜島・・・でも鹿児島に住んでいる人は皆思ったことがあるだろう。灰さえ降らなければ鹿児島はとってもいいとこなのにな・・・。

平成24年7月吉日

編集長（医局長） 大堀純一郎

編集委員 大夫堀昌子

さくらじま 第26号

平成24年7月2日 印刷

平成24年7月5日 発行

発 行 鹿 児 島 大 学 大 学 院
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室
電話 (099) 275-5410

印 刷 斯 文 堂 株 式 会 社
電話 (099) 268-8211